鞠智城
東京シンポジウム

KIKUCHIJO TOKYO SYMPOSIUM

「鞠智城の終焉と平安社会
～古代山城の退場～」

2017
1.28
13:00～17:30

明治大学アカデミーコモン・
アカデミーホール

［主催］
熊本県　熊本県教育委員会
明治大学日本古代学研究所

［後援］
明治大学博物館　明治大学社会連携機構
熊本県文化財保護協会

鞠智城イメージキャラクター
ころう君

鞠智城・東京シンポジウム

鞠智城の終焉と平安社会

～古代山城の退場～

日時：平成２９年１月２８日（土）　13：00～17：30
場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台 1-1）
主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学日本古代学研究所
後援：明治大学博物館、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会

日　程

12：00　開　場

13：00　開　会

あいさつ　熊本県教育長　宮尾　千加子
明治大学名誉教授　吉村　武彦

来賓紹介

13：20　報告　13:20～13:50

「平安時代の鞠智城跡」

西住 欣一郎（熊本県教育委員会）

13：50　講演①13:50～14:30

「古代山城の真実　―鞠智城はなんのためにつくられたのか―」

井上　和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

14：30　休憩

14：45　講演②　14:45～15:25

「東アジア世界の変貌と鞠智城―国際環境から見た 9 世紀以降の鞠智城―」

榎本　淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

15：25　講演③　15:25～16:05

「平安時代の大宰府と古代山城」

松川　博一（九州歴史資料館学芸員）

16：05　休憩

16：20　パネルディスカッション 16:20～17:30

コーディネーター　佐藤　信　（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
パネラー　井上　和人
榎本　淳一
松川　博一
西住　欣一郎

17：30　閉　会

※1/23～2/3「熊本地震と文化財（パネル展）」を開催（アカデミーコモン 1F 展示スペース）

報告者・講演者・コーディネーター紹介

【報告者】

西住　欣一郎（にしずみ　きんいちろう）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県文化課で埋蔵文化財担当、鞠智城跡調査主査、課長補佐を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」館長。専門は考古学。

【講演者】

井上　和人　（いのうえ　かずと）

東京外国語大学卒業。東京大学文学部考古学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、奈良文化財研究所副所長を経て、現在、明治大学大学院文学研究科特任教授。東洋文庫客員研究員。奈良文化財研究所名誉研究員。文学博士。専門は古代考古学。著書に『古代都城制条里制の実証的研究』『日本古代都城制の研究』『平城京ロマン』など。

榎本　淳一　（えのもと　じゅんいち）

東京大学文学部国史学専修課程卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、工学院大学一般教育部教授などを経て、現在、大正大学文学部教授。博士（文学）。専門は日本古代史。著書に『唐王朝と古代日本』、編著に『古代中国・日本における学術と支配』などがある。

松川　博一　（まつかわ　ひろかず）

山口大学大学院人文科学研究科修士課程修了。太宰府市文化ふれあい館学芸主任、九州国立博物館研究員、福岡県教育庁総務部文化財保護課技術主査を経て、現在、九州歴史資料館学芸研究班長・学芸員。専門は日本古代史（大宰府の軍制・出土文字資料など）。

【コーディネーター】

佐藤　信　（さとう　まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。文学博士。専門は日本古代史。

（発表順・敬称略）

【目次】

報告　「平安時代の鞠智城跡」（西住欣一郎）……1

基調講演「古代山城の真実　―鞠智城はなんのためにつくられたのか―」（井上　和人）……11

講演①　「東アジア世界の変貌と鞠智城

―国際環境から見た9世紀以降の鞠智城―」（榎本　淳一）……23

講演②　「平安時代の大宰府と古代山城」（松川　博一）……31

参考資料

【報　告】

平安時代の鞠智城跡

西住欣一郎（熊本県教育委員会）

1　鞠智城跡の位置と環境

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫する７世紀後半、朝鮮半島南西部において開戦した白村江の戦い（663）に敗れた大和朝廷が、唐・新羅連合軍の日本への侵攻に備えて西日本各地に防衛拠点として構築した古代山城の一つである。現在確認できている古代山城の中では、最も南に位置している。

その城跡は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する一級河川菊池川（総延長 72km）の中流域、山鹿市、菊池市の市境に位置する。鞠智城跡は菊池川河口から直線距離で約 27km 遡った箇所に存在する。県境の筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高 1,052m）南西麓に形成された丘陵地帯の南端近く、標高約 145mの台地状の丘陵上（通称；米原台地）に、鞠智城は立地している。その南には、菊池川沿いに発達した肥沃な菊鹿盆地が広がる。この地は、古代律令制下、肥後国菊池郡に属し、城跡周辺に残る「木野」地名から、『和名類聚抄』にみる「城野郷」に比定されている。

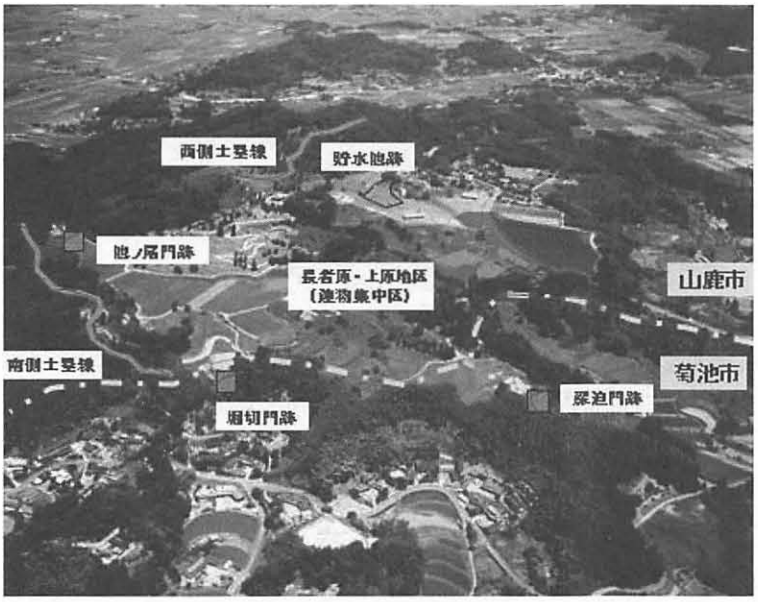


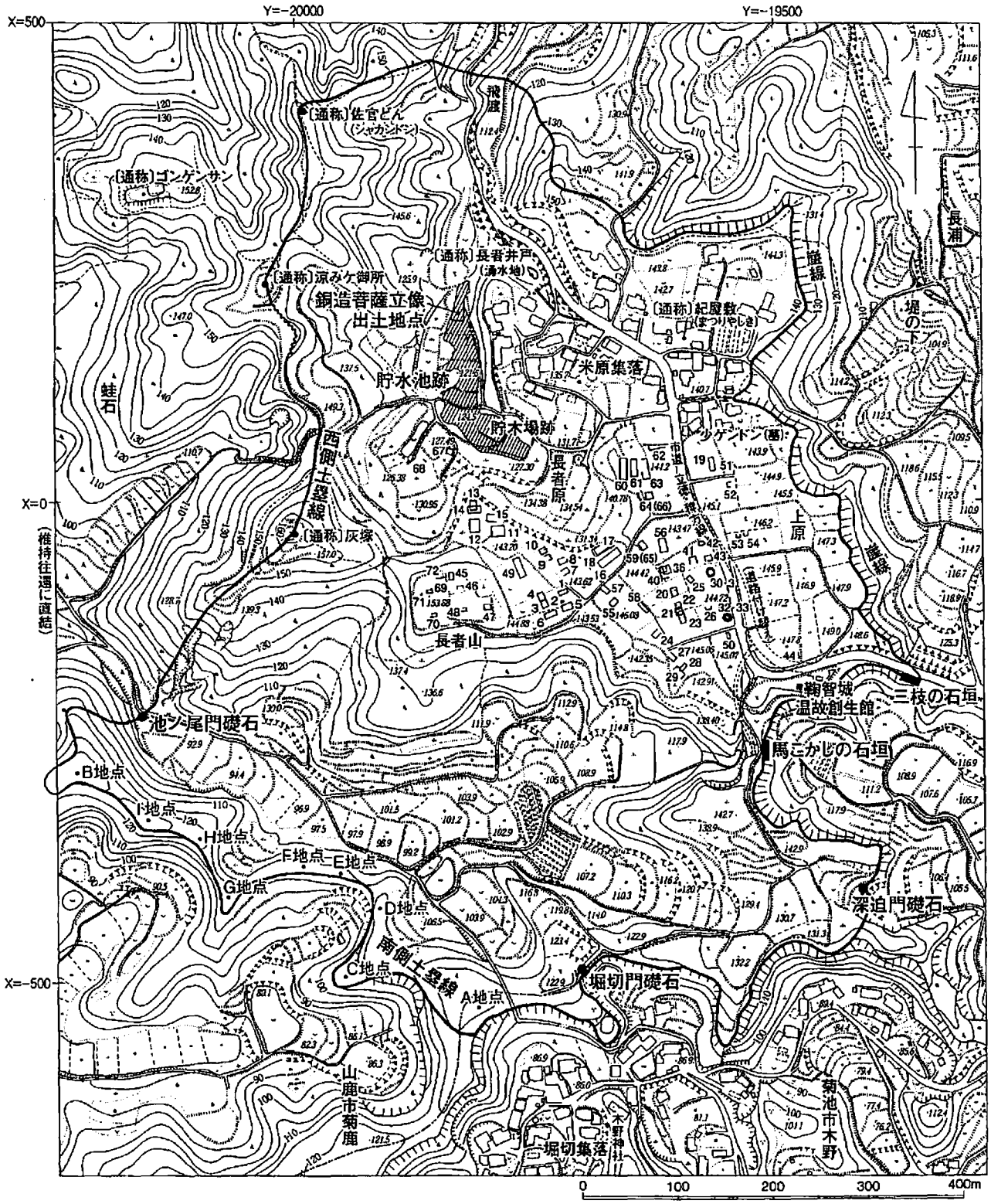
写真１　鞠智城跡全景（南側上空より）

鞠智城跡の城域については、古くから広域説、狭域説が論じられてきたが、現在では、狭域説の範囲の中で、西側・南西部の土塁線と南東部・東側の崖線で区画された周長約 3.5km、面積約 55ha、標高約 90～171mの範囲を城域としている。その範囲は広域なため、山鹿市と菊池市に跨っている。（写真１・第１図）。

2　発掘調査の成果

鞠智城跡の発掘調査は、昭和 42（1967）年度に第１次調査を行い、平成 22（2010）年度までに第 32 次の調査を実施した。その調査成果は『鞠智城跡Ⅱ』（2012）熊本県教育委員会の報告書に総括されている。主な成果は次の通りである。

遺構としては、古代山城では唯一の八角形建物跡をはじめとする 72 棟の建物跡や約 5,300 ㎡の規模をもつ貯水池跡が確認されている。また、外郭線上の三箇所には城門や門礎石が検出されており、版築工法による土塁跡も存在している（第１図）。



第１図　鞠智城跡全体平面図

遺物としては、須恵器、土師器などの土器や単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、木製品に加え、『秦人忍口五斗』銘の付札木簡や百済系の銅造菩薩立像などが出土している（写真２）。

継続して行った確認調査の成果が認められ、城跡の範囲を包括する約 64.8ha が平成 16 年に国史跡として指定された。

百済系銅造菩薩立像

「秦人忍口五斗」銘木簡

須恵器

単弁八葉蓮華文軒丸瓦

木製品（平鍬・横槌）

土師器

写真２　鞠智城跡の出土遺物

（１）鞠智城跡の時期区分

総括報告書である『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会（2012）の中で、72 棟の建物跡について、遺構の重複関係や建物方向等を検討して、時期区分や変遷を考察している。

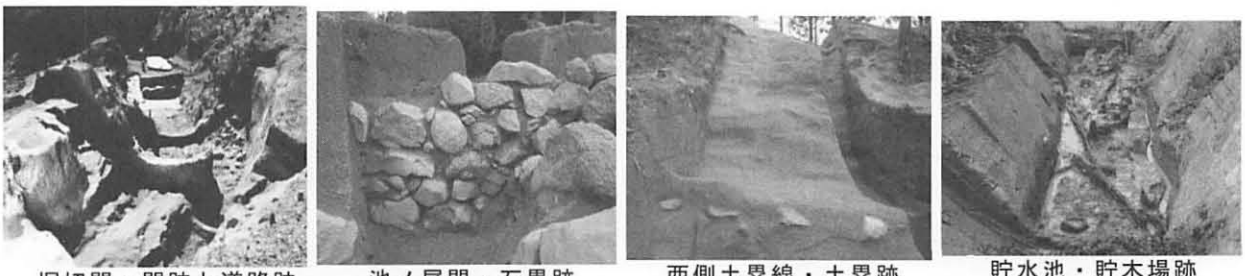
さらに、城としての役割・機能変化についても検討を加え、7 世紀後半から 10 世紀中頃まで存続した鞠智城跡のⅠ期～Ⅴ期の変遷過程を下記のように明らかにしている。

【鞠智城Ⅰ期（７世紀第３四半期～第４四半期）】

Ⅰ期は鞠智城の創建期である。創建年代は、『続日本紀』文武２（698）年に「繕治」した大野、基肄の２城の創建（665）とほぼ同時期に推定している。外郭線上に３箇所の城門、土塁線、城内に掘立柱建物、貯水池などを緊急的に整備し、城としての最低限の機能を備えた段階と考えられる（写真３・第３図）。

【鞠智城Ⅱ期（７世紀末～８世紀第１四半期前半）】

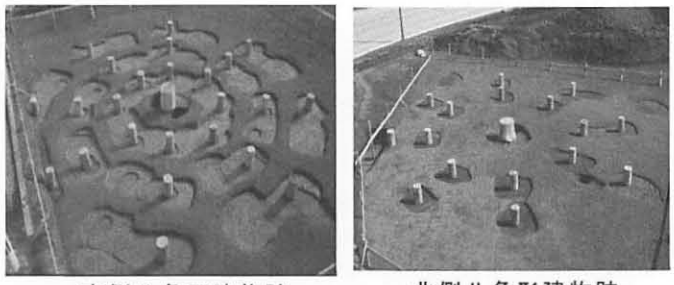
Ⅱ期は鞠智城の隆盛期である。「L」字形に掘立柱建物を配置した管理棟的建物群とそれらを取り囲む区画溝が出現する。建物群を取り込んだ区画溝はこの箇所だけのものである（第２図）。この遺構群の南側に二棟の八角形建物や総柱建物等を配置するなど、城内施設の充実が図られる。土器の出土量はこの時期が最も多く、城の管理・運営に多くの人員が配置されたものと考えられる（写真４・第３図）。



堀切門・門跡と道路跡　池ノ尾門・石塁跡　西側土塁線・土塁跡　貯水池・貯木場跡

写真３　鞠智城Ⅰ期の遺構

第２図　管理棟的建物群と区画溝

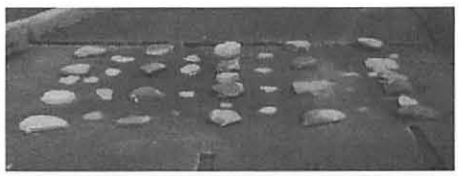


南側八角形建物跡　北側八角形建物跡

写真４　鞠智城Ⅱ期の遺構

【鞠智城Ⅲ期（８世紀第１四半期後半～第３四半期）】

Ⅲ期は鞠智城の転換期である。城内の建物配置はⅡ期を踏襲しながらも、総柱建物が小型礎石を使用した礎石建物に建て替えられる（写真5）。出土土器の空白期に当たることから、城の存続上必要な最小限度の維持・管理がなされていたと考えられる（第３図）。



65 号建物跡（次の鞠智城Ⅳ期の礎石建物跡と重複しており、小型の礎石のほうが 65 号建物跡）

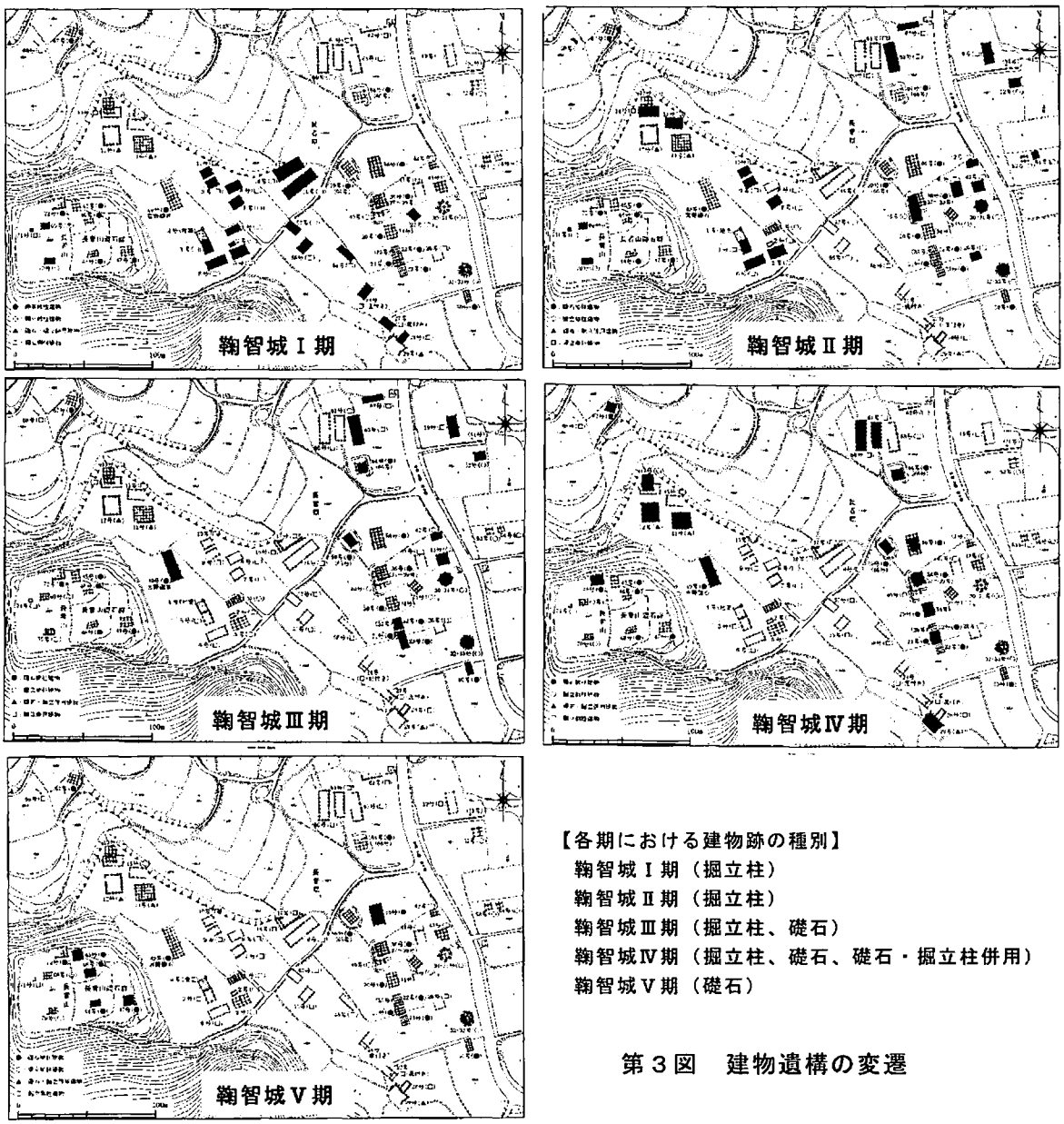
写真５　鞠智城Ⅲ期の遺構

【鞠智城Ⅳ期（８世紀第４四半期～９世紀第３四半期）】

Ⅳ期は鞠智城の変革期である。管理棟的建物群の消失や貯水池中央部の機能低下がある一方、Ⅲ期の礎石建物が大型礎石を使用した礎石建物に建て替えられ、食糧等の備蓄機能が主体となる。これら建物群は、当該期末に焼失しており、『文徳実録』天安２（858）年の不動倉火災との関連が想定される（第３図）。

【鞠智城Ⅴ期（９世紀第４四半期～10 世紀第３四半期)】

Ⅴ期は鞠智城の終末期である。城内の建物数は減少し、城の機能は低下するものの、大型の礎石建物を火災後に建て直すなど、食糧等の備蓄機能は存続する（第３図)。



【各期における建物跡の種別】
鞠智城Ⅰ期（掘立柱）
鞠智城Ⅱ期（掘立柱）
鞠智城Ⅲ期（掘立柱、礎石）
鞠智城Ⅳ期（掘立柱、礎石、礎石・掘立柱併用）
鞠智城Ⅴ期（礎石）

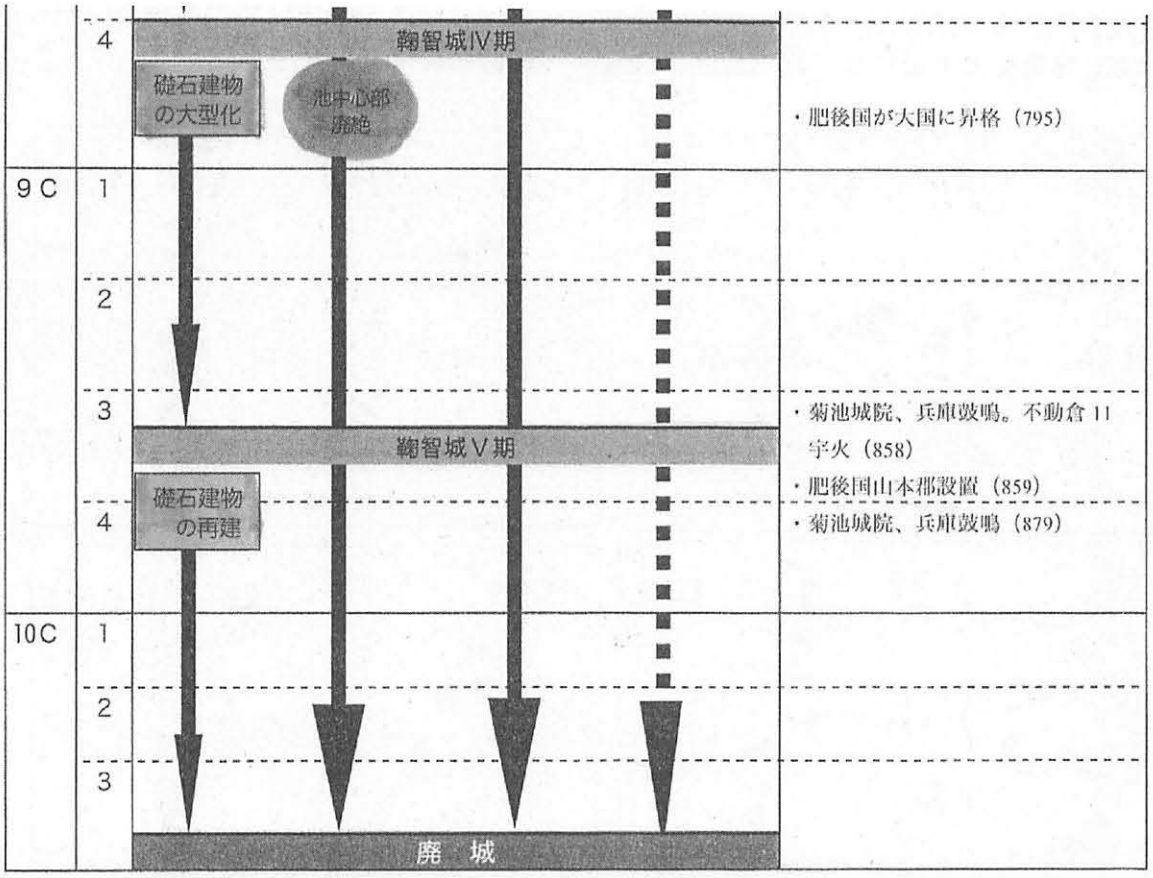
第３図　建物遺構の変遷

今回のシンポジウムの話題の焦点は平安時代である。それで、対象となるのは鞠智城Ⅳ期と鞠智城Ⅴ期である。この時期では、建物跡と貯水池跡で、大きな変化が認められる。その様子を概観する。

Ⅳ期では、礎石建物は大きな礎石建物に建て替えられる。礎石建物の大型化が見られる。また、Ⅴ期では火災で焼失した礎石建物を同じ場所で再建している（第４図)。

貯水池跡の中心部では、Ⅳ期になって、飲料水の水汲み場としての機能をもつ木組遺構や建築材を水中貯木していた貯木場の上部に土が堆積し、その機能を果たせなくなってい

る（第４図）。



第４図　Ⅳ期とⅤ期の様子

（２）建物跡の変化

Ⅳ期の建物跡には次のものがある。側柱の掘立柱建物跡２棟（６０号・６１号）（写真６）、総柱の掘立柱建物跡１棟（１３号）、総柱の礎石建物跡９棟（２０号・２１号・３６号・４９号・５０号・５９号・６４号・６７号・７２号）（写真７）、礎石建物の可能性が高い建物１棟（５６号建物の下層で部分的に礎石を確認した建物）、総柱の礎石・掘立柱併用建物跡３棟（１１号・１２号・２９号）（写真８）である。

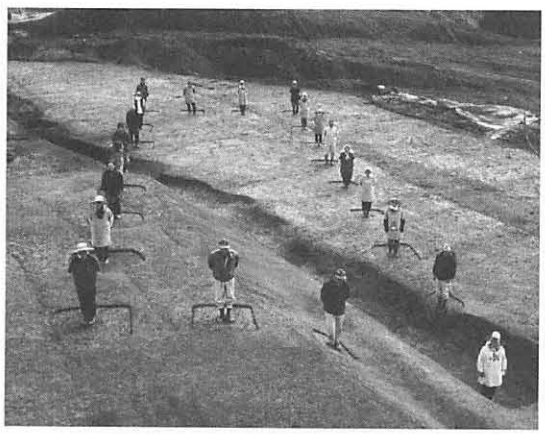


写真６　６０号建物跡

写真７　５９号建物跡

Ⅳ期の建物の中で、礎石・掘立柱併用建物跡は特異なものである。海野　聡氏の論考によれば、次のように考察されている。礎石・掘立柱併用建物は７世紀末頃から出現した。この建物は古代の宮殿、地方官衙、地方寺院等で３４例が確認されている。これらの建物について、礎石建物と掘立柱建物の柱の大きさに着目して分類がされている。鞠智城の１１号・１２号建物跡は柱の大きさがほぼ等しく総柱型である２－Ａに該当する。２－Ａは床の上にさらに柱を立てる建物と考えられる。上部構造と下部構造が分離した倉や管柱（二階建て以上の木造建築）の楼と推察されている。さらに、１１号・１２号建物跡の礎石部分は桁行４間、梁行３間の総柱である。この規格は鞠智城の礎石総柱建物の中で最も多い平面規模である。この点を考慮すると、標準的な礎石総柱建物の周囲に掘立柱が廻った構造と考えられる（海野 2014）。

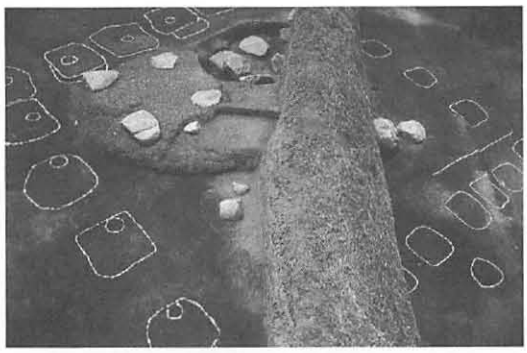


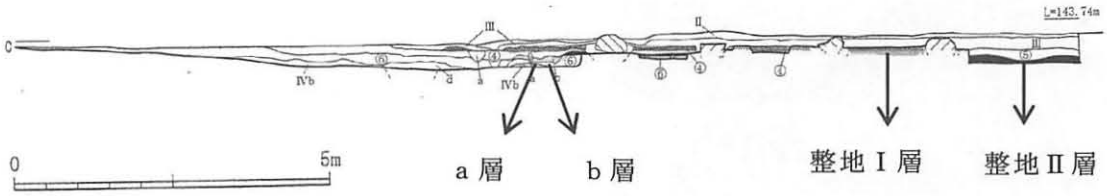
写真８　１１号建物跡

写真９　５６号建物跡

Ⅴ期の建物跡は、総柱の礎石建物跡５棟（４５号・４６号・４７号・４８号・５６号）である。これらの中で、建物の建て替えが良くわかるのが５６号建物跡である（写真９）。

５６号建物跡では土層を観察するために部分的に深掘りした。トレンチＣ－Ｄ地点の土層断面を観察した結果は次の通りである。建物を建てるために整地した層が二面ある。整地Ⅰ層は５６号建物に伴うものである。この整地層を掘り込んで礎石を据えている。整地Ⅰ層の下位にある整地Ⅱ層は、５６号下層建物に伴うものである。この整地層の端部に堆積したａ層・ｂ層は５６号下層建物の時期と判断できる。このａ層・ｂ層には焼土や炭化米等の炭化物が多量に含まれる。このことから、５６号下層建物は火災で焼失したと考えられる（第５図）。

この建物に号数を付けていないのは、建物全体の確認をしていないからである。この建物全体を検出するには、５６号建物に伴う層を取り除かなければならない。そうすれば、５６号建物を破壊することになるので、保存の必要性から全面の発掘調査を行っていない。

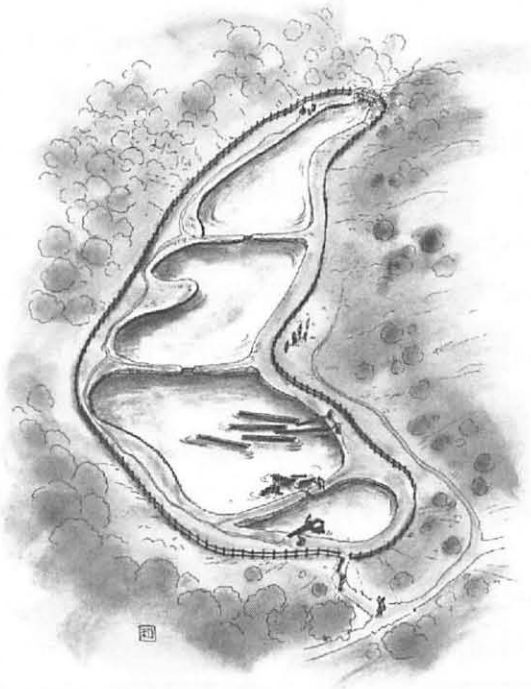


第５図　５６号建物土層断面図

（３）貯水池跡の変化

貯水池跡は建物が集中している長者原地区の北側谷部にある。自然地形を巧みに利用しながら人工的な工事を行い、湧水を溜めている。貯水池跡の水成粘土層の広がりは約5,300 ㎡もある。貯水池跡は飲料水を確保するだけでなく、建築材の貯木場としての役割も果たしているため大規模である（第１図）。

池頭付近に飲料水を汲むための木組遺構がある。この遺構から北西方向に離れた箇所に貯木場がある。貯木場には、柱や桁等の大型建築材と木舞（壁の下地等）や蔓等の小型な建築材・材料とを分けて水中保管している。池の内部を機能的に使い分け、迅速な建築や補修に備えていたと想定できる（第６図・写真１０）。



第６図　貯水池イメージ
（イラスト：早川和子）

上記の水汲み場や貯木場を活用するには、定期的に堆積土を除去する等のメンテナンスが必要である。木組遺構・建築材等を包含する⑪層が他の層と比べて、凹凸が著しく、層の厚さが薄い。この⑪層の状況は、堆積土を除去する等のメンテナンスを行った痕跡と考えられる。

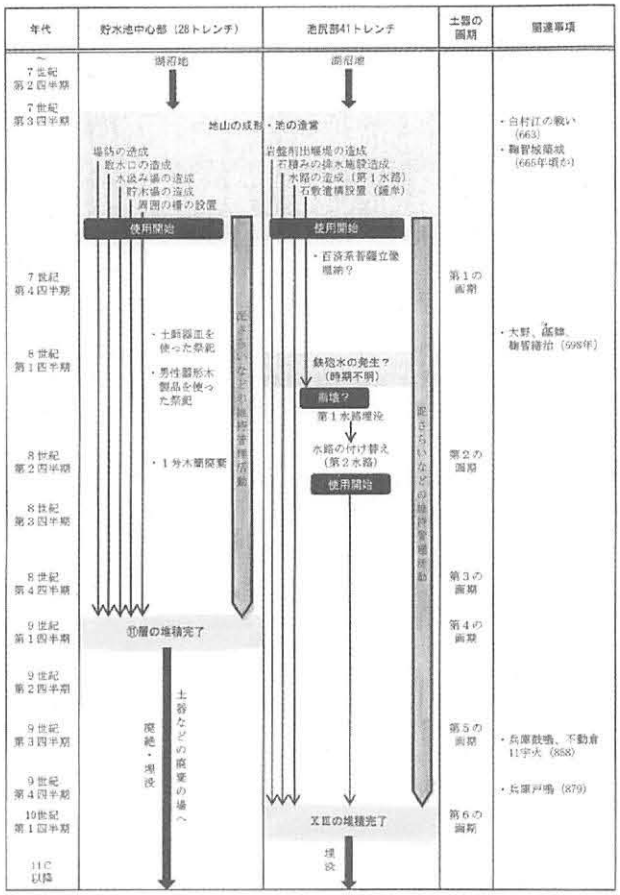
写真１０　貯木場跡Ｂ地区（小型建築材）

この貯水池の維持・管理活動がされなくなり、８世紀の終わり頃には⑪層の堆積が始まり、９世紀の初め頃には堆積が完了し、池中央部の機能が停止したと考えられる。また、池尻部では１０世紀近くまでは池の維持・管理活動が行われていたが、その後、行われなくなり完全に放棄され、埋没したと想定できる（第７図）。

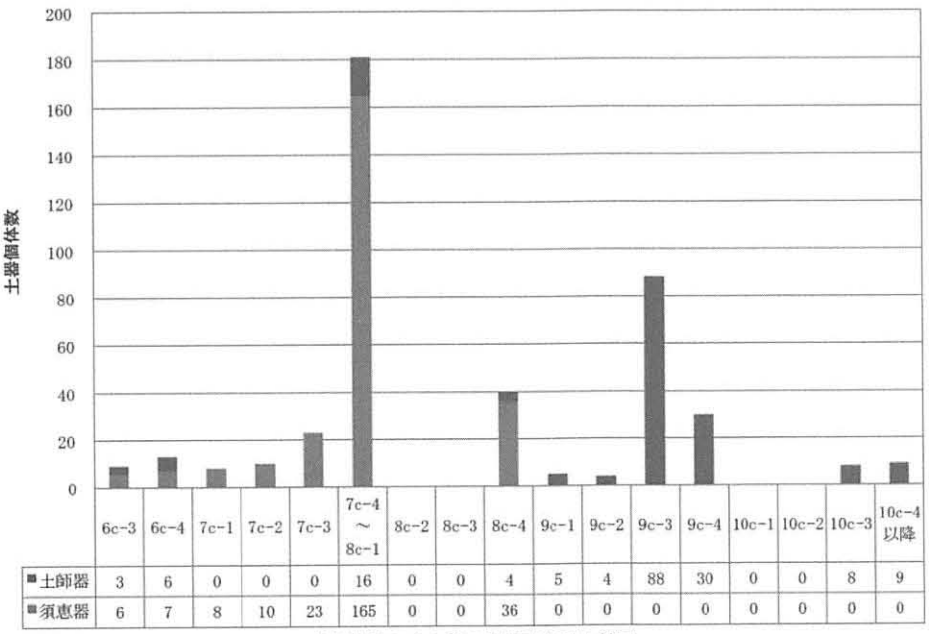
（４）出土土器量の変化

鞠智城跡からはコンテナ約 240 箱の須恵器・土師器が出土している。これらの土器の時期別出土量を考察し、その結果を第８図に示した。

第８図を見ると、出土量が大きく変化する



第７図　貯水池跡の変遷



第８図　出土土器量の変化

画期が存在する。最初の画期は７世紀第４四半期から８世紀第１四半期であり、土器の出土量が最大である。この時期は概ね鞠智城Ⅱ期であり、城を修復した時期（698 年）と重なる。鞠智城での活動が盛んな状況を反映していると考えられる。

第２の画期は鞠智城Ⅲ期の期間内である８世紀第２・第３四半期に発生する。土器が全くといっていいほど出土していない。鞠智城で人の存在が感じられない。

第３の画期は８世紀第４四半期である。土器空白期の直後であり、再び土器が使用される。土器の主体は須恵器である。この時期は鞠智城Ⅳ期の初めの頃である。

最後の画期は９世紀第３・第４四半期におこる。９世紀第３四半期の出土量は城内で二番目に多く、土師器だけ使用されている。この時期は鞠智城Ⅳ期の終末に該当する。

【引用・参考文献】

熊本県文化財調査報告第 276 集『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第 8～32 次調査報告－』熊本県教育委員会 2012

海野　聡「鞠智城の遺構の特徴と特殊性－建物の基礎構造と貯木場を中心に－」『鞠智城跡Ⅱ―論考編１－』熊本県教育委員会 2014

【講演①】

古代山城の真実

－鞠智城は、なんのためにつくられたのか。－

井上和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

1. はじめに

古代山城とは、なんだったのか。明治時代以来の長い研究史の中で、様々な理解が示されてきました。近年では、やや異論もあるようですが、軍事的な役割を果たしたもので、築造された時期は、おおむね７世紀後半期であるとの共通理解がえられているところです。ただし、古代山城について鮮明な歴史像を描くには、いくつかの見解の相違があり、むしろ研究は混迷した状況にあるように思います。なお、古代山城築造について史書に記録されているのは、日本書紀の天智（称制）４年（665）の大野城、基肄城などが最初で、天智９年（670）の「長門に城を一、筑紫に城を二築く」の記事が最後です。

日本列島で古代山城が造られはじめた年代について、663 年に朝鮮半島の白村江での戦いで、日本が唐に完敗した直後、唐が日本に侵略しかねない情勢のもとで開始されたとみる研究者達がいます。白村江の敗戦に先立つ 660 年に、朝鮮半島三国の一つであった百済が、唐と新羅の連合軍に滅ぼされました。従前から同盟関係にあった日本が、百済再興の救援軍を派遣することになりますが、661 年に、大和政権は斉明天皇みずから援軍を率いて大和飛鳥から九州へとたどり、筑後平野に新造された朝倉橘広庭宮へ入るという歴史の流れの中で、筑後平野周辺の山城群がまず作られたとみる研究者も少なくありません。

古代山城がいつまで作られていたのかについても、見解の相異があります。最近の研究の潮流といいますか、風潮では、山城築造は日本書記にみられる天智朝（～671 年）だけではなく、天武朝（672 年～）さらには文武朝の頃（700 年前後）にまで続いていたとされています。そして、天武朝以降に築造された山城は、天智朝が対外的防衛用であったのに対し、国内地域勢力に対する国家権力示威を目的としたものであったというのです。

古代山城に期待された役割についても、最近でもなおいくつかの異なったみかたがあります。列挙しますと、“緊急時の逃げ込み用の城”“白村江直後の緊迫した情勢下で交通の拠点に築かれたランドマーク的存在”“天皇・中央政府の意志のもとに構築された、すぐれて政治的な記念物”などなどです。このようにみてきますと、築造年代、築造意義ともに真相はいったいなんであるのか、という疑問がわいてこざるをえません。

それは、1300 年前の遥かな時の彼方に、茫洋と霞んでしまったからなのでしょうか。いえ、私は、そうではないと考えます。これまでの研究の積み重ねの中で、思い込みや過大評価、あるいは既往の説や特定の歴史観などにしばられていたのではなかったか、と思うのです。以下、これまで語られることのなかった古代山城の真実をお話いたします。

2. 中華帝国による征服戦争－その動因

まず理解しておかなければならないことは、なぜ唐は百済を滅ぼし、日本列島を征服しようとしたのか、その理由についてです。

それは、唐が華夷秩序に基づいた国際秩序を構築しようとしたからなのです。

唐（そして隋）は、漢の滅亡以来、4百年近く続いた悲惨な分裂抗争の時代を終熄させ、広大な中華大陸を統治するための大義名分として「華夷思想」を重要視していました。華夷思想は、中華帝国こそが世界の中心であり、文明の頂点に立つ存在であるとする中華思想という、特定民族至上主義（エスノセントリズム）に基づく国家統治思想です。

中華皇帝の絶対的責務は、周囲の野蛮な国々に文明の恩沢を授けることであり、それにより文明化した国々は中華皇帝に朝貢する。これによって、皇帝は中華帝国の統治権力を獲得し、維持することができる。したがって、服属する国が多ければ多いほど皇権は強大なものとなり、逆に一国でも服属を拒むとなると皇帝の権威は失墜し、統治権力が弱体化する。その結果、国内の安定が危うくなり、ひいては国そのものも滅びかねないというもので、華夷秩序は当時重視された唯一の統治思想の表現でした。文明の恩恵を授けるとはいえ、実態は武力による恫喝そのものでした。周辺の諸国家にとっては、独善的かつ横暴きわまりないことであったことは間違いありませんが、これが歴史の現実であったのです。

3. 古代山城の分布状況と類型

(1) 古代山城の分布状況　こんにち古代山城として確認されている遺跡は22ヵ所あります。そのうち半数以上の14の山城が九州北半部にあり、瀬戸内海両岸地域に7ヵ所、近畿の大阪府・奈良県境に1ヵ所分布しています。九州での分布状況をみますと“大宰府”の周囲、筑後平野の周囲に山城が集中している様相をみてとることができます。

(2) 古代山城の3類型　22ヵ所の古代山城のうち21の山城は、比較的高い山の中腹以上に城壁を巡らせる“山岳型山城”と、低い丘陵の周縁に城壁があり、一部は周囲の低平地とほとんど同じ標高にまで城壁がおよぶ状況をみせる“丘陵型山城”との2つの類型に、明確に分別することができます。

そして第3の類型として区別しなければならないのが、鞠智城(G)です。おおむね丘陵型に近いのですが、やや規模が大きく、なによりも内部にかなり広い平坦地が確保されているという、ほかにはない、きわだった特徴があります。

4. 諸説の“非”

(1) 斉明朝築造説の非　斉明天皇の政権は、660年の百済滅亡後、百済復興の援軍を派遣すること決定します。みずから軍隊を率いた斉明女帝は、翌661年5月に、筑後の朝倉宮に入りますが、7月24日に朝倉宮で崩御します。以後、朝倉宮が政事軍事の中枢であった形跡はありません。

斉明朝築造説では、筑後平野の周縁の杷木城(j)、帯隈山城(i)、おつぼ山城(h)、高良山城(F)、

女山城(k)が朝倉宮を防護しているように分布しているとみる点を重視するのですが、わずか2ヵ月余りの滞在であったことを踏まえますと、この説は現実的でないといえましょう。

(2)天武朝以降まで築造継続説の非　先に述べましたように、古代山城築造が天武朝以降、文武朝のころまで続けられるとみるが最近の主潮のようです。しかし、文献史料の上でも、発掘調査の成果の上からも、その判断を実証する根拠は、実はありません。

(3)大宰府防衛説の非　北部九州の古代山城については、大宰府防衛のためのものとの理解があります。大野城、阿志岐城、基肄城は、まさに大宰府を囲む位置にあります。また大野城の築城に先立つ664年には、大宰府のすぐ西北に、大規模な防塁である水城が築造されています。

大宰府に関しての発掘調査では、最も古い段階の遺構群は7世紀後半期としか捉えられていません。つまり、水城が築造された664年、そして大野城や基肄城が築造された665年時点にあって、大宰府が政治的軍事的に枢要な施設として、つまり防護されるべき施設として存在していた確証はないのです。なによりも、大宰府防衛目的であれば、水城は最終防衛線であることになります。そのすぐ傍に重要拠点を設定することが、軍事常識に適うとは考えがたいのです。

5. 古代山城を正しく理解する

以上のように考えますと、22の古代山城は、665年から670年頃までの限られた期間に集中的に築造されたとみる必要があります。そうとしますと、当然のこととして、それぞれの山城は、一体的な軍略のもとに各地に配置されたと考える必要があります。

(1)唐の軍事的侵略という危機　663年の白村江の敗戦直後、中大兄皇子政権が、そして日本列島全体が危惧したのは、百済の征服を遂行した唐が、華夷秩序をより拡充するための軍事的行動として、さらに日本列島を攻略する危険性がきわめて現実化したことでした。

唐が日本列島に侵攻する場合、その最終目標は、日本王権の所在地である大和飛鳥の都であり、天皇（大王）の捕捉ないし殺害をもって、日本の国家体制を壊滅させ、日本列島を唐に服属させることにあります。当時、唐の侵略に対する国防の最高責任者は中大兄皇子でした。

中大兄皇子は661年の母・斉明天皇の没後、当然の後継者でしたが、667年の近江・大津宮遷都の翌年正月に、ようやく天皇位に即位します。この8年間の天皇不在という異常事態の理由は、国家の危機に直面している状況の中で、即位の儀式に費やす時間的余裕はなく、その間、もっぱら国防施策の推進に専念する必要があったからでしょう。

(2)古代山城防衛網の構築　古代山城の築造は、唐の侵攻に対抗するための最重要の防衛策の発動でした。660年の百済攻撃に際して、唐は13万の軍勢を海路、百済に送り込み、新羅軍4万と連合して攻略戦を展開しました。その結果、最終攻撃目標である王都・泗沘城（扶余）は陥落し、国王、皇太子以下1万2千人余りが拘束され、唐都洛陽に連行されました。また多くの百済人が唐の追及を逃れるべく日本列島に渡来しました。その人々は大和政権の庇護下にはいり、日本書紀では帰化人と呼称されます。中大兄皇子政権が対唐防衛策を講じる際に、長年にわたる新羅、高句麗との戦役に携わり、さらに唐の侵略軍隊と対峙してきた百済の亡命帰化人たる軍人や軍事技術者の協力を求めたことは、日本書紀に明記されているところです。

(3)高安城の軍略　こんにち確認されている 22 ヵ所の古代山城のうち、最大の規模を示すのは高安城(V)です。城壁の長さが約 8.8km あり、次に規模の大きい大野城や讃岐城山城の約 6.5km にくらべても格段に大きいのです。高安城は大阪府と奈良県境の南北に延びる生駒山地の南端に位置しており、すぐ南に大和川の峡谷を見下ろす地点にあります。

唐の大規模軍隊が瀬戸内海を東航し、大阪湾岸に上陸して大和飛鳥を攻撃するには、大和川の峡谷に沿ってを遡上するのが唯一の経路です。つまり、高安城は唐軍が奈良盆地に侵入する局面で、狭隘な大和川峡谷で唐軍の行軍を阻害し、殲滅するためにもっとも効果的な場所に設定されたものであることは間違いありません。

かりにこの大和川峡谷での攻撃が不首尾に終った場合には、最終決戦地は奈良盆地、飛鳥の周辺ということになります。つまり、飛鳥王都防衛にとって、高安城は最後の攻撃拠点なのであり、そこを最大規模に設定したことは当然のこととして理解できるでしょう。

(4)筑紫野谷の軍略　高安城の立地条件と共通する古代山城があります。大野城(C)、阿志岐城(D)、基肄城(E)の３城です。大宰府の存在を度外視すれば、３つの山城が福岡平野と筑後平野を結ぶ幅が狭まった谷地形（これを筑紫野谷と呼びましょう）を扼す位置にあることが明瞭です。この筑紫野谷を南に抜けると、筑後平野がひろがり、その正面に高良山城が配置されています。

6. 山城群の軍略

唐侵略軍としては、九州に上陸することなく瀬戸内海に進軍して飛鳥王都を攻撃するのがもっとも効率的な軍略でしょう。しかし、その場合、唐の大軍が兵力を損耗することなく直接王都を攻撃することになり、日本側として防衛上、きわめて危険な状況となります。あるいは、唐軍の軍略としては、いったん九州北部に上陸し、態勢を整えるという方途を選択する可能性があるとの判断もありえます。

日本側として期すべきは、まず九州で唐軍に最大限の打撃を与えることです。かりに唐軍が北部九州に上陸せずに東行しようとしても、九州に駐屯している軍隊が唐軍の背後を攻撃する態勢をみせれば、唐軍は九州に上陸し、迎撃戦力の殲滅作戦を実行せざるを得ないでしょう。

日本側として組み立てた、山城群を主軸とする軍略は、およそ次のようであったと考えます。

軍略〔１〕北部九州での迎撃

(1)対馬・金田城は、敵軍の日本列島への侵入を察知し、情報を本土へ伝達するための軍事情報拠点。

(2)雷山城(筑前)は、北方つまり玄海灘への眺望にすぐれた地形にあり、敵船団の監視城塞としての役割を担う。

(3)上陸適地である福岡平野の南辺に水城を敢えて設定し、その背後に控える大規模迎撃戦力の存在を侵略軍に察知させる。

(4)迎撃軍の主力は筑後平野に置く。

(5)侵略軍が筑後平野に進撃しようとするとき、まず水城で迎撃し、さらに筑紫野谷で大野、阿志岐、基肄の３山城を拠点とする攻撃を加える。

(6)それでもなお、侵略軍に十分な打撃を与え得ない場合、筑後平野に誘き出し、そこを決戦の場とする。

筑後平野での決戦の要撃（迎え撃つ攻撃）の中枢は高良山城に置かれたと考えます。日本側の軍

隊は山城だけでなく、平野部の各所にも配置されていたと考えるのが妥当でしょう。

(7)筑後平野西縁から北縁にかけて配置された３つの丘陵型山城の位置をみると、おつぼ山城は平野の西端、杷木城は東端、帯隈山城は基肄城とおつぼ山城の中間地点にあり、それぞれがほぼ等間隔になるような計画的な配置であったことを示している。役割については、最重要な決戦に際して、(a)兵站物資の備蓄・補給基地の機能をもたせる。(b)朝鮮半島百済地域で多く見られるように、小規模ではあるが軍隊の集結場所。(c)みせかけの軍隊集結場所として機能させる、といういずれかの軍略であったことが考えられる。

唐軍は海路進撃してくるのですから、兵器や食料などの補給つまり兵站が大きな弱点となります。それだけに、日本側としては地の利を最も有効に発揮させるためにも、十分な兵站戦略を構築しておくことが勝利のためには必須でした。丘陵型山城は、攻撃や防御の拠点としては信頼感に欠ける地形と構造を示しています。山岳型山城と比べると、目立たない場所に立地していることも考え合わせれば、兵站基地としての役割を想定することに、より蓋然性があるでしょう。

軍略〔２〕鞠智城の役割

このように考えますと、筑後平野周縁山城群の南方の、山地、丘陵地帯を間において隔てた地点に設定された第３類型である鞠智城の役割は、おのずから鮮明になってきます。すなわち、

(8)筑紫野谷での攻略、さらに筑後平野での決戦で日本側が敗北した場合、敗残兵達が退避する場所であり、そこで兵力を再結集して、おそらくすでに東行を再開した唐軍を背後から追撃する体制を構築するための拠点。

つまり鞠智城は九州迎撃作戦の最後の砦として設定されたのです。城壁で囲まれた郭内に、ほかの山城にはない広い平坦地が確保されていることは、こうした機能を裏付けるものです。また、ここが侵略軍による攻撃で陥落するという状況に陥った場合、残兵は背後に控える九州南部の広大な山野に難を逃れ、再興を期すことが可能な立地条件下にあります。

(9)女山城は、高良山城および筑後平野の戦場と鞠智城をつなぐ中間基地かつ兵站拠点の機能をもつ。

軍略〔３〕瀬戸内海に侵入する唐軍への攻撃

(10)九州北東部の鹿毛馬城・御所ヶ谷城・唐原城は福岡平野、筑紫野谷、筑後平野での敵軍殲滅が不成功であった場合、敵の軍隊が瀬戸内海に侵入する経路にあり、九州内でできるだけ敵軍を損耗させる戦略に供する。

(a)御所ヶ谷城（豊前）は攻撃部隊の集結拠点。

(b)鹿毛馬城（筑前）と唐原城（豊前）は御所ヶ谷山城軍の後背地での兵站拠点。

(11)(10)の作戦で敵軍に十分な打撃を与えられなかった場合、瀬戸内海を敵軍が東侵する際に南北両岸から攻撃するための軍隊集結地点。水軍や平野部に配置された軍隊と連動した迎撃戦を想定していたと考える。

(a)瀬戸内海北岸ー石城山城（周防）・鬼ノ城（備中）・大廻小廻山城（備中）・播磨城山山城（播磨）

(b)瀬戸内海南岸ー永納山城（伊予：兵站拠点）・讃岐城山城（讃岐）・屋嶋城（讃岐）

軍略〔４〕大和最終防衛体制

(12)高安城は、王都飛鳥に敵侵略軍が侵入することを防御する戦略の最終軍事拠点（既述）

(13) 飛鳥王都周辺での防衛軍隊の配備

7. 防人の真実

九州の防衛軍として玄界灘の沿岸や対馬に防人（さきもり・ボウジン）と呼ばれる軍隊の配備が開始されるのも、水城の築造と同じく、白村江の敗戦の翌年、664年のことでした。当初の防人が北部九州のどこに配属され、どのような軍事活動をおこなったのか、史書に記録するところはありませんが、北部九州あるいはその周辺の各要所に配備されたと想定することもでき、そうとすれば、664年以降、西日本各地で進められた古代山城の築造工事をはじめ、山城以外の軍隊駐屯地の整備や軍事教練などにも、多くの防人の兵士達が携わったのではないかと考えます。

ところで、防人として北部九州に派遣された兵士の多くが、東国つまり関東地方を中心とする地方の青年たちであったことは良く知られています。その理由として、西日本地域の青年たちの多くが、朝鮮半島での戦争で戦死し負傷し捕虜となっていたので、兵士になる適齢期の男性が著しく不足していたから、東国から動員せざるを得なかったという見方がありえます。

では中央地域－畿内地域からの兵士動員はどうであったかといいますと、古代山城の中で唯一の近畿地方での古代山城である高安城は、先に述べましたように、最大規模に設定されています。ましてや、王都の周辺には大規模な防衛軍隊を配備していたに違いありません。つまり防人に東国の青年たちを動員したのは、西国での兵士適齢世代の欠如と、近畿周辺での王都防衛兵力の大量確保の必要性ということが背景にあったのです。

国を挙げての、そうした大規模な土木工事を伴う国防事業は、664年から数年の間に集中して遂行されました。短時日のうちに大規模な山城を建設するには、多大な労働力と費用とが必要であったと推測されますが、この壮大な事業の遂行にあたり、特段の抵抗や反抗の形跡は残されていません。外国軍隊の侵略により国家が失われ、人としての尊厳を剥奪され、他国に隷属することの悲惨さ、無惨さに対する恐怖感、拒否感などの強い危機意識を、当時の日本列島の人々が共有していたからだったのではないでしょうか。

8. 古代山城無益論

百済の版図の中枢部であった忠清南道では230ヵ所の山城が確認されています（忠清南道8214㎢・兵庫県8396㎢）。また、660年に百済が滅亡した時、百済領内に多くの山城が存在していたことは、三国史記や日本書紀あるいは旧唐書などの記載からも知ることができます。

留意しなければならないことは、百済の領域にあったこれら多くの山城に課せられた役割は、泗沘都城（扶余）とそこに所在する王宮の主である百済国王を防護することであったという点です。しかるに、660年6月21日に、新羅軍と唐軍が朝鮮半島西海岸で邂逅してから、唐・新羅連合軍による包囲攻撃で泗沘城が陥落する7月13日まで20日余りです。しかも唐軍は10日以上、黄海を渡海した疲労を解くために休息をとったとされているので、百済を滅亡させるのに要した日時はわずか10日ほどでした。数多くの山城は、いったいどれほどの軍事的機能を果たしえたのでしょうか。しかり、百済での山城群を基軸にした国家防衛方式は、唐の侵略軍の攻撃に対して、有効な軍事機能を発揮しえなかったのです。

9. 古代山城の否定と超克－日本列島古代中央集権国家の構築－

朝鮮半島での動乱－唐による征服戦争－を受けて、中大兄皇子政権（＝天智政権）は、大和飛鳥そして近江大津の王都を防衛するために西日本要塞化政策を推進したのでした。また、そうした防衛のありかたは、いずれも百済の方式を導入したものでした。

百済を初め、新羅でも高句麗でも数多くの山城が築造されていました。しかし、それらは数百年の間くり返されてきた３国間での争闘には有効であったかもしれませんが、唐の大規模な軍勢に対しては、きわめて無力な存在であったのです。それにもかかわらず、天智天皇とその政権は百済式防衛方式の実現に全力を傾注しますが、これは天智政権の決定的な失政であったというべきです。日本列島を唐の攻撃から防衛するための懸命の施策であったことは間違いないでしょう。しかし、方法を間違っては、守るべきものも守りえません。このままでは、日本列島は唐に容易に蹂躙されかねない、という深刻な危機感を抱いた人々がいたと、私は考えています。それが大海人皇子とその勢力だったのです。

672 年の壬申の乱の原因は、国家防衛策についての路線闘争であったとみます。天智政権の推進した西日本軍事要塞化策では、唐の軍事的侵略に対して有害無益であるとの判断にたって、大海人皇子側の勢力が天智政権の排除を断行したのではなかったでしょうか。大海人皇子は、中臣（藤原）鎌足の 669 年の死を契機にして、国防政策の大転換を図る決断をしたのだと思います。

大海人皇子とその勢力は、壬申の乱を通じて天智政権側の排除を敢行し、飛鳥に王宮を移します。673 年正月、大海人皇子は天皇に即位します。天武の新政権は天智政権のとった防衛施設構築路線を放棄し、列島規模での中央集権国家体制建設推進をいっそう加速させるのです。

朝鮮半島では、668 年に高句麗が唐・新羅連合軍の攻撃により滅亡します。そしてその直後から、唐と新羅の間で軍事的衝突がはじまるのです。新羅は朝鮮半島での覇権を得るために唐の軍事力を借りたのでしたが、アジア地域全体の華夷秩序の構築を至上目的とする唐が、なんの利得もなく軍隊を送り犠牲を払うわけがありません。ただ、唐は西南に接する強い軍事国家であった吐蕃（チベット）の脅威が増大したことで、676 年に至り、朝鮮半島の制圧を断念します。しかし、新羅が全権を掌握したのではなく、あくまでも唐に服属する形で国家としての存続を認められたのでした。

したがって、壬申の乱（672 年）直後の天武政権発足の時点では、唐の日本列島侵略という危機は依然として継続していました。また 676 年の唐軍の朝鮮半島撤退後も、日本にとって、唐がいつまた侵略の矛先を向けてくるか、油断できない状態であったことも忘れてはなりません。そうした緊迫した情勢の中、天武政権は古代山城築造事業を放棄し、以後、文武、元明政権にいたるまで日本列島中央集権国家体制の構築が進められたのです。この国家体制とは国防国家にほかなりません。702 年の大宝律令の完成、710 年の平城京遷都なども、国防国家を作り上げるための重要な歴史階梯だと捉える必要があります。

このように、日本古代国家は、６世紀末から７世紀代にかけて、中国大陸で勃興した隋・唐帝国が華夷秩序を作りあげようと、周囲の国々に対してとった軍事的征服活動に対応して構築されたものでした。古代山城も、そして鞠智城の存在も、この大きな歴史のうねりの中でこそ、その意味を鮮明に理解することができるでしょう。（了）

古代山城・都城関係略年表

年　代	事　項
589　崇峻2	隋が中国大陸・南北朝を統一。
618　推古26	隋が滅び、唐が興る。
628　推古36	唐が中国大陸・天下平定。
630　舒明2	飛鳥岡本宮へ遷都(飛鳥ではじめての王宮)。
	第1次遣唐使の派遣。
645　皇極4	大化の改新(飛鳥板蓋宮)。
孝徳1	難波宮へ遷都。
656　斉明1	後飛鳥岡本宮へ遷都。
660　斉明6	唐・新羅連合軍が百済を滅ぼす。
	大和朝廷は百済遺臣の救援を決定。
661　斉明7	5月、斉明天皇、朝倉橘広庭宮に入る。
	7月、天皇、朝倉宮にて崩御。
663　天智2	百済西岸の白村江での海戦で唐に敗北。
664　天智3	対馬島、壱岐島、筑紫国等に防と烽を置く。また筑紫に水城を築く。
665　天智4	長門国に築城。筑紫国に大野、椽（基肄）の二城を築く。
667　天智6	3月、近江・大津宮に遷都。
	11月、倭国に高安城、讃吉国山田郡に屋嶋城、対馬国に金田城を築く。
668　天智7	中大兄皇子、天皇に即位(これまでは称制)。
	唐軍、高句麗を滅ぼす。
(668　or 669)	唐が倭国を征伐するとしながら、内実は新羅を討伐しようとしているとの情報が伝わる。
669　天智8	中臣(藤原)鎌足、没す。
	新羅・唐の間で戦争（羅唐戦争）はじまる（～676）。
670　天智9	高安城修理。また長門城一、筑紫城二を築く。
671　天智10	百済亡命人の達卒・谷那晋首らに兵法での貢献に対し叙位する。
	新羅軍、旧百済領で唐軍と戦う。
	11月、唐使・郭務悰ら二千人、筑紫に至る。
	12月、天智天皇、崩御。
672　天智11	5月、唐使・郭務悰ら帰国。
	6～8月、壬申の乱。
	新羅軍、高句麗遺軍とともに唐軍と戦い、勝ち、負けを繰り返す。
673　天武2	大海人皇子、後飛鳥岡本宮にて天皇に即位。
676　天武5	唐、安東都護府を遼東に遷し、朝鮮半島の統治を新羅に認める。
694　持統8	藤原京遷都。
698　文武2	大宰府に命じて、大野、基肄、鞠智三城を繕治させる。
699　文武3	大宰府に命じて、三野、稲積二城を修させる。
710　和銅3	平城京遷都。
719　養老3	備後国安那郡茨城、葦田郡常城を停止する。

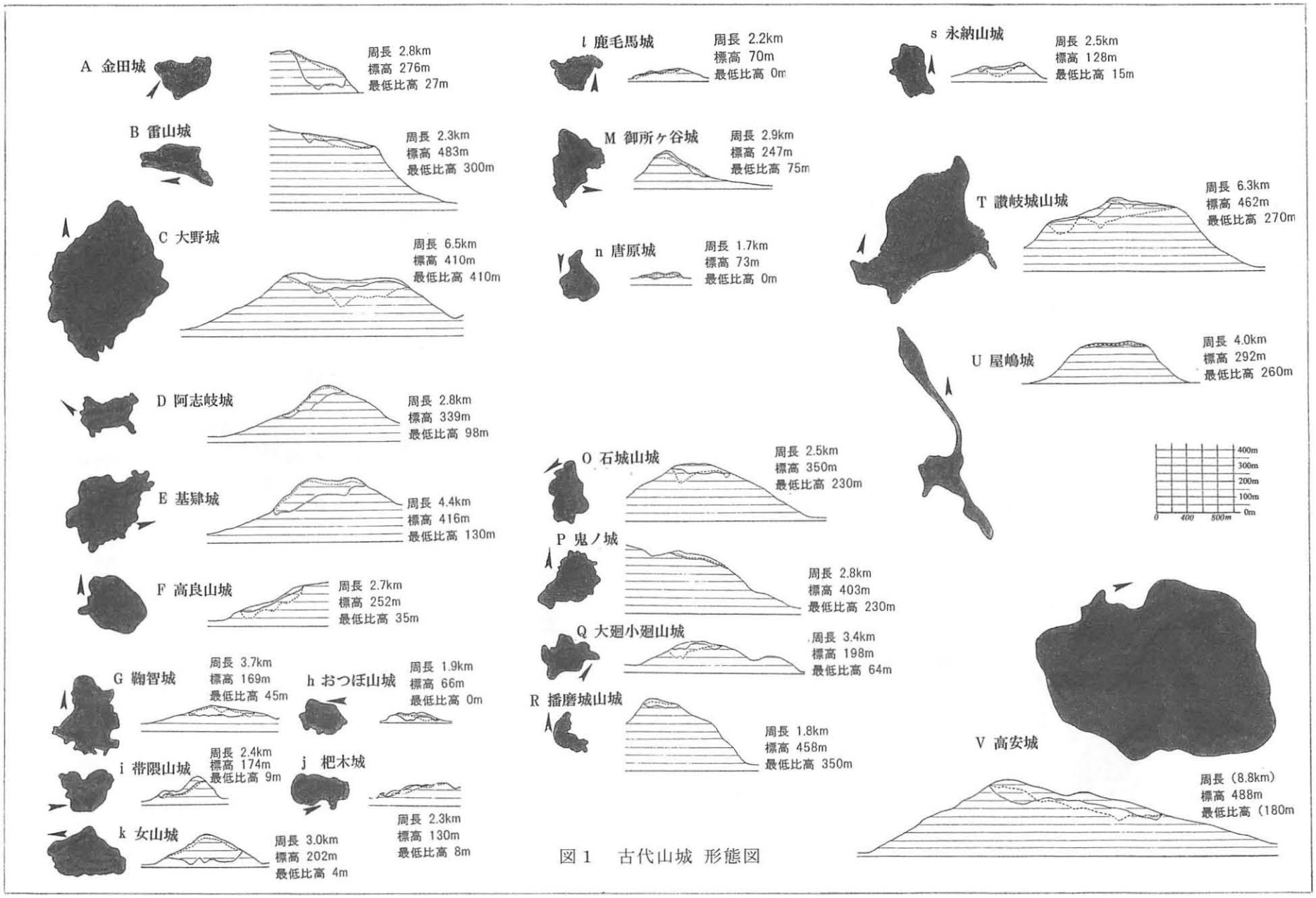
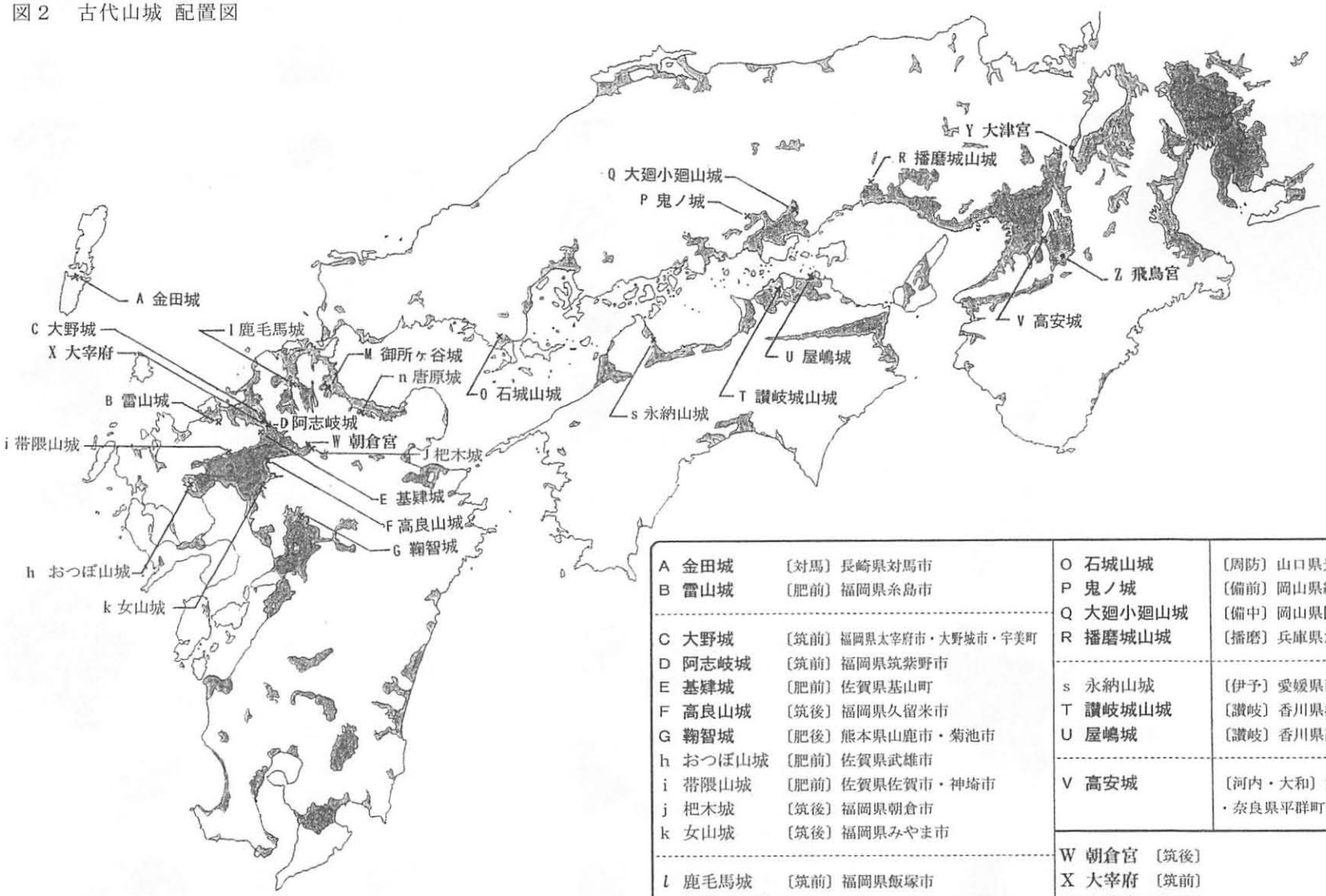

A 金田城
周長 2.8km
標高 276m
最低比高 27m
B 雷山城
周長 2.3km
標高 483m
最低比高 300m
C 大野城
周長 6.5km
標高 410m
最低比高 410m
D 阿志岐城
周長 2.8km
標高 339m
最低比高 98m
E 基肄城
周長 4.4km
標高 416m
最低比高 130m
F 高良山城
周長 2.7km
標高 252m
最低比高 35m
G 鞠智城
周長 3.7km
標高 169m
最低比高 45m
h おつぼ山城
周長 1.9km
標高 66m
最低比高 0m
i 帯隈山城
周長 2.4km
標高 174m
最低比高 9m
j 杷木城
周長 2.3km
標高 130m
最低比高 8m
k 女山城
周長 3.0km
標高 202m
最低比高 4m
l 鹿毛馬城
周長 2.2km
標高 70m
最低比高 0m
M 御所ヶ谷城
周長 2.9km
標高 247m
最低比高 75m
n 唐原城
周長 1.7km
標高 73m
最低比高 0m
O 石城山城
周長 2.5km
標高 350m
最低比高 230m
P 鬼ノ城
周長 2.8km
標高 403m
最低比高 230m
Q 大廻小廻山城
周長 3.4km
標高 198m
最低比高 64m
R 播磨城山城
周長 1.8km
標高 458m
最低比高 350m
s 永納山城
周長 2.5km
標高 128m
最低比高 15m
T 讃岐城山城
周長 6.3km
標高 462m
最低比高 270m
U 屋嶋城
周長 4.0km
標高 292m
最低比高 260m
400m
300m
200m
100m
0m
0
400
800m
V 高安城
周長 (8.8km)
標高 488m
最低比高 (180m

図1　古代山城 形態図

図２　古代山城 配置図



A 金田城	〔対馬〕	長崎県対馬市
B 雷山城	〔肥前〕	福岡県糸島市
C 大野城	〔筑前〕	福岡県太宰府市・大野城市・宇美町
D 阿志岐城	〔筑前〕	福岡県筑紫野市
E 基肄城	〔肥前〕	佐賀県基山町
F 高良山城	〔筑後〕	福岡県久留米市
G 鞠智城	〔肥後〕	熊本県山鹿市・菊池市
h おつぼ山城	〔肥前〕	佐賀県武雄市
i 帯隈山城	〔肥前〕	佐賀県佐賀市・神埼市
j 杷木城	〔筑後〕	福岡県朝倉市
k 女山城	〔筑後〕	福岡県みやま市
l 鹿毛馬城	〔筑前〕	福岡県飯塚市
M 御所ヶ谷城	〔豊前〕	福岡県行橋市・みやこ町
n 唐原城	〔豊前〕	福岡県上毛町
O 石城山城	〔周防〕	山口県光市・田布施町
P 鬼ノ城	〔備前〕	岡山県総社市
Q 大廻小廻山城	〔備中〕	岡山県岡山市
R 播磨城山城	〔播磨〕	兵庫県たつの市
s 永納山城	〔伊予〕	愛媛県西条市・今治市
T 讃岐城山城	〔讃岐〕	香川県坂出市・丸亀市
U 屋嶋城	〔讃岐〕	香川県高松市
V 高安城	〔河内・大和〕	大阪府八尾市・奈良県平群町・三郷町
W 朝倉宮	〔筑後〕	
X 大宰府	〔筑前〕	
Y 大津宮	〔近江〕	
Z 飛鳥宮	〔大和〕	

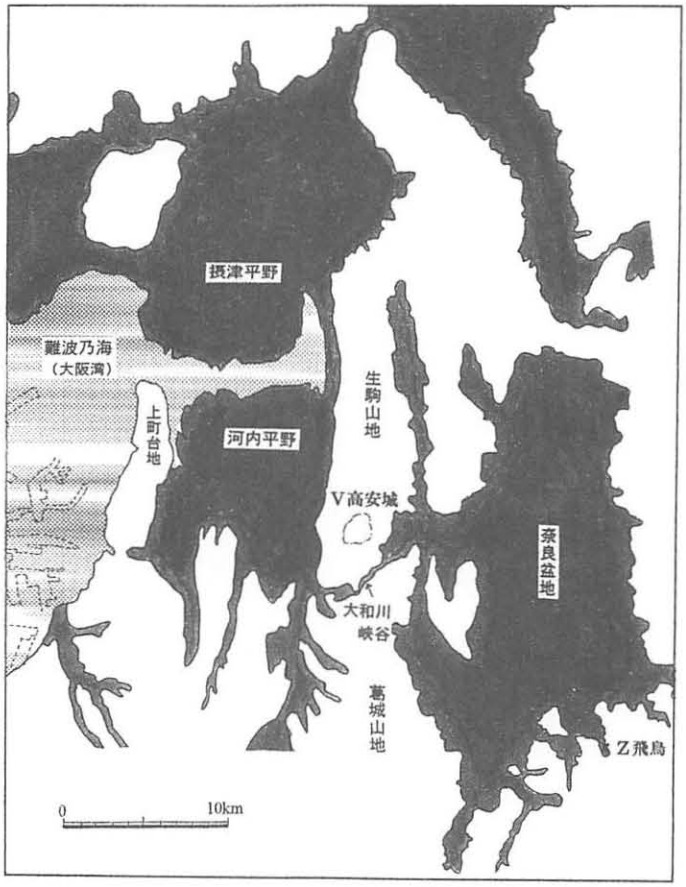


図３　高安城の位置

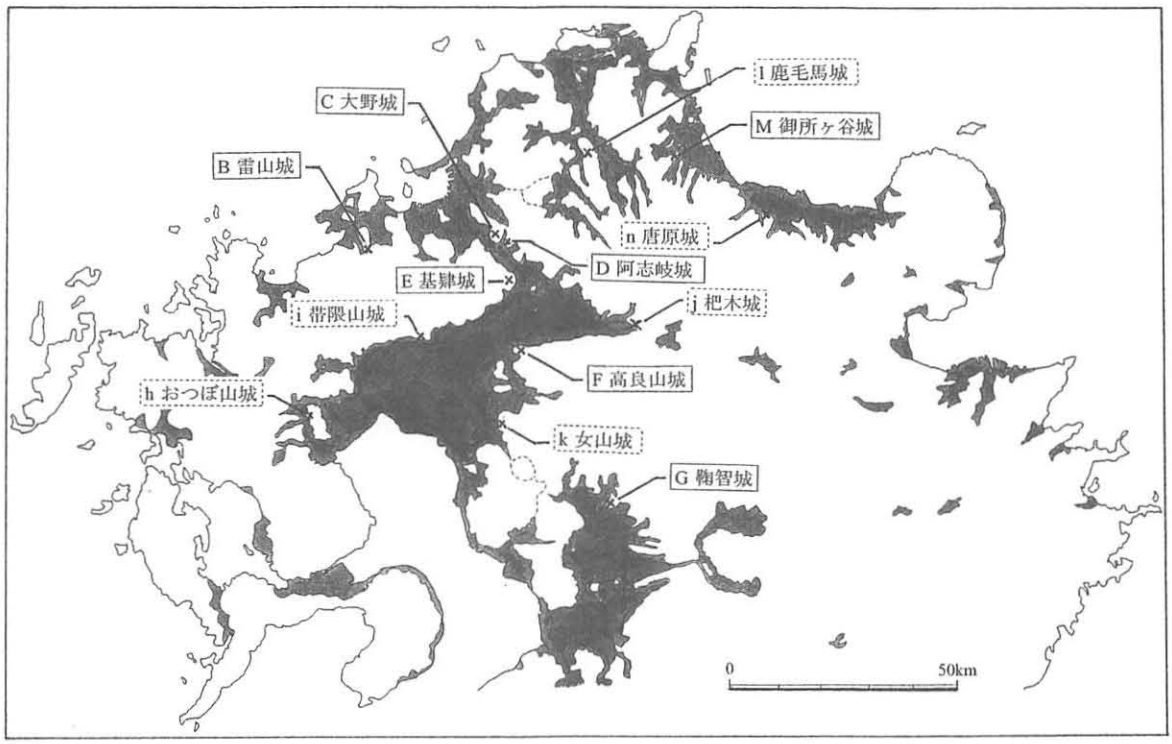


図４　北部九州域 古代山城配置図

【講演②】

東アジア世界の変貌と鞠智城

―国際環境から見た9世紀以降の鞠智城―

榎本淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

はじめに

鞠智城も含め古代日本の山城のほとんどは、7 世紀後半の東アジアの激動・争乱という国際環境を背景に築造されたと考えられている。その東アジアの争乱も 8 世紀にはほぼおさまり、唐を中心に形成された国際秩序の下、国際関係も安定した。そのため、多くの山城はこの時期に必要性を失い、廃絶に向かったと考えられる。そうした中で、鞠智城は、中絶した時期があったとしても、10 世紀半ばまで存続が確認される希有な山城である。なぜ、鞠智城は長く存在し続けたのか、その理由を古代日本の国際環境から考えてみたいと思う。

鞠智城が 9 世紀以降も存続した理由については、新羅海賊の来寇など、この時期の対外的な危機に対処するための防衛拠点として必要とされた、とする説が有力である。しかし、それならば、なぜ他の山城は鞠智城と同じように存続しなかったのか、という問題について十分説明することはできないと思われる。また、考古学的な研究成果とも整合しないところがあるように思われ、従来の説を再検討する必要があると考える。とはいえ、鞠智城（菊池城院・菊池郡城院）に関する 9 世紀以降の史料は僅か 4 件であり、いずれも簡略なものである。史料的な制約による限界もあるが、文献史学の立場から、平安時代の鞠智城の実態に出来得る限り迫ってみたいと思う。

1．東アジア世界の変貌

（1）「東アジア世界」とは

西嶋定生氏によれば、「東アジア世界」とは、近代以前に存在した自己完結的な歴史世界の一つであり、中国に起源をもつ漢字・儒教・律令制・中国仏教という諸文化を共有する文化圏（東アジア文化圏）であるとともに、文化圏形成を促した「冊封体制」という中国中心の政治秩序で結ばれた政治圏でもあったとされる。さらに、この「東アジア世界」は唐の滅亡によって一旦崩壊し、10 世紀以降、「東アジア交易圏」ともいうべき経済的国際関係が形成されたとする。この「東アジア世界」論は、古代日本を取り巻いた国際環境を説明する優れた歴史理論として、長く大きな影響力を有し続けている。しかし、研究進展により、様々な批判が出され、修正すべき点も少なくない。

私見によれば、「東アジア交易圏」は唐滅亡前の 9 世紀には誕生しており、「東アジア世界」の変貌は 9 世紀（その端緒は 8 世紀末）には顕著となっていたと思われる。ま

た、「東アジア世界」における国際秩序は、「冊封体制」よりも「朝貢体制」の方がより実質的な役割を果たしたと考えている。

（2） 9世紀（8世紀末以降）の東アジア世界の変貌

8世紀と9世紀以降の違い

8世紀	⇒	9世紀
律令制		律令制の放棄ないし大幅な改変
中央集権・軍国体制		地方分権化・権力の分散化
重農主義（抑商主義）		商業・貿易の発展
唐文化の共有		各国文化の台頭（ナショナリズム）

国際関係の即して述べると、

① 国際秩序の弱体化・喪失 → 国家間通交の減少ないし消失、関係の稀薄化
→ 疑心暗鬼を生みやすい環境

② 対外管理の緩和・弱体化 → 民間貿易の展開 → 海賊の横行

③ 徴兵制廃止・地方分権化 → 中央集権的大規模常備軍の消失
→ 外征軍の編成困難

という変化を指摘できる。国家間の交渉が減少・消滅することで、国家間の利害が衝突することは無くなり、大規模な外征軍を派遣できる体制でもなくなったことにより、戦争は起きにくい状況となった。このような国際的な緊張緩和により、軍団兵士制の廃止、山城の停廃につながったのではないだろうか。

一方で、国家の対外管理の緩和・弱体化により、民間貿易の活発化と同時に海賊が横行しやすい環境が作られることになった。また、国家間の関係性の稀薄化は、相互に情報不足による疑心暗鬼を生み出すこととともなった。

8世紀末以降の軍縮

792（延暦11）年　諸国の軍団制停廃（大宰府管内諸国など辺要は例外）、健児置く
795（延暦14）年　壱岐・対馬以外の防人停止、兵士を辺戍に充てる
797（延暦16）年　大宰府弩師停廃
799（延暦18）年　大宰府管内を除き燧候停廃
804（延暦23）年　壱岐の防人停止（対馬にのみ残存）
813（弘仁4）　年　大宰府管内七国の兵士減定（ほぼ半減）
826（天長3）　年　大宰府管内の兵士を廃し、選士１７２０人・衛卒２００人を置く

西海道6国2島の防衛兵員の変化・減少

東国防人　2264人（天平10年帰還時）　3000人（天平神護2年時）

→対馬防人102人（天安元年5月）

軍団兵士

弘仁4年以前　18団　17100人（6番交替勤務か）

弘仁4年減定　18団　9000人

天長3年全廃　→選士1720人・衛卒200人（4番交替勤務）

⇒定員規模では、約20000人から約2000人へ縮小　→　十分の一の規模に

2．9世紀以降の鞠智城関係史料の再検討

（1）4つの史料の確認

9世紀以降の鞠智城に関する史料は、4つしかない。その全てが兵庫の怪異記事で、うち1つは不動倉の火事についても記している。ここから、何が読み取れるであろうか。

9世紀の鞠智城に関する史料

①『日本文徳天皇実録』天安2（858）年閏2月丙辰条

丙辰。肥後国言すらく、「菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」と。

②『日本文徳天皇実録』天安2（858）年閏2月丁巳条

丁巳。又鳴る。

③『日本文徳天皇実録』天安2（858）年6月己酉条

己酉。（中略）又肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城の不動倉十一宇に火あり。

④『日本三代実録』元慶3（879）年3月16日丙午条

十六日丙午。（中略）又肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る。

（参考）『日本三代実録』貞観17（875）年6月20日辛未条

廿日辛未。大宰府言すらく、「大鳥二、肥後國玉名郡の倉の上に集ひ、西を向きて鳴く。群鳥數百、菊池郡の倉舎の葺草を噬み抜く」と。

（2）兵庫の怪異記事の検討

鞠智城の兵庫の怪異をどのように理解すべきかが、問題である。新羅の兵寇、対外的な脅威・危機と結びつけて理解するのは妥当であろうか。兵寇や対外的脅威を意味するもの

ならば、なぜ、鞠智城ばかりで、大野城やその他の山城には怪異が起こらないのか。

兵庫の怪異は、多くが地方官庁の兵庫の怪異である。日本海沿岸の怪異は隣国の兵寇に結びつけられる傾向があるが、それ以外の地域はそのような受け止め方はされていない。鞠智城の位置は微妙であるが、あまり隣国の兵寇・対外的脅威との関連性は問題化していないのではないか。

そもそも9世紀に兵庫の怪異が多くなったのは、讖緯思想的なもの（物事の予兆を考える）が普及したこと（物の怪の登場も）と、大地激動の時代（火山噴火と大地震の時代）によるところが大きいのではないか。それに加え、国家間の通交が途絶え、情報不足による相互不信、疑心暗鬼によって増幅されたところがあるのではないか

六国史に見える兵庫の怪異記事

『続日本紀』

① 宝亀11年10月3日「左右兵庫鼓鳴。後聞箭動聲。其響達内兵庫。」

② 天應元年3月26日「美作國言。今月十二日未三點。苫田郡兵庫鳴動。又四點鳴動如先。其響如雷霆之漸動。伊勢國言。今月十六日午時。鈴鹿關西中城門大鼓。自鳴三聲。」

③ 天應元年4月1日「左右兵庫兵器自鳴。其聲如以大石投地也。」

④ 天應元年12月26日「兵庫南院東庫鳴。」

『日本後紀』

⑤ 大同元年3月22日「日赤無光、兵庫夜鳴、是夜月蝕之。」

『続日本後紀』

⑥ 承和4年3月20日「美濃國言。二月廿五日、兵庫自鳴。至三月十五日、亦鳴同前。」

⑦ 承和7年5月2日「但馬國言。養父郡兵庫鼓無故夜鳴。聲聞數里。又氣多郡兵庫鼓夜自鳴。聲如行鼓。」

『日本文徳天皇実録』

⑧ 齊衡2年8月10日「兵庫中鼓自鳴。」

⑨ 天安2年閏2月24日「肥後國言。菊池城院兵庫鼓自鳴。」

⑩ 天安2年閏2月25日「又（菊池城院兵庫鼓）鳴。」

⑪ 天安2年6月20日「又肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。」

⑫ 天安2年8月4日「若狭國言。兵庫鳴。如振鈴。」

『日本三代実録』

⑬ 貞観元年正月22日「大宰府言。筑前國志摩郡兵庫鼓自鳴。庫中弓矢有聲聞外。」

⑭ 貞観8年4月18日「若狭國言。納印公文庫并兵庫鳴。下知國司曰。今月十六日。宣告彼國。戒慎兵戎。今言。兵庫自鳴。陰陽寮言。遠國之人當有來投。兵亂天行。成灾相仍。宜益警衛兼防灾疫。」

⑮ 貞観8年9月7日「美作國言。兵庫鳴。聲如擊鉦鼓。」

⑯-1 貞観 11 年 12 月 14 日「遣使者於伊勢大神宮奉幣。告文曰。・・・・・又廳樓兵庫等上尓。依有大鳥之恠天卜求尓。隣國乃兵革之事可在止卜申利。・・・・・」

⑯-2 貞観 11 年 12 月 17 日「去夏。新羅海賊掠奪貢綿。又有大鳥。集大宰府廳事并門樓兵庫上。神祇官陰陽寮言。當有隣境兵寇。肥後國風水。陸奥國地震。損傷廨舍。没溺黎元。」

⑯-3 貞観 11 年 12 月 29 日「遣使者於石清水神社奉幣。告文曰。・・・・・又廳樓兵庫等上尓。依有大鳥之恠天卜求尓。隣國乃兵革之事可在止卜申利。・・・・・」

⑯ -4 貞観 12 年 2 月 12 日「先是。大宰府言。（對馬嶋人卜部乙屎麻呂、新羅の襲撃計画を告げる）是日。 勅。彼府去夏言。大鳥集于兵庫樓上。決之卜筮。當夏隣兵。・・・・・」

⑯-5 貞観 12 年 2 月 15 日「勅遣従五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄。奉幣八幡宮大菩薩宮。及香椎廟。宗像大神。甘南備神。告文曰。・・・・・・又廳樓兵庫等上尓。依有大鳥之恠天卜求尓。隣國乃兵革之事可在止卜申利。・・・・・」

⑯-6 貞観 12 年 6 月 13 日「先是。大宰府言。肥前國杵嶋郡兵庫震動。鼓鳴二聲。決之著龜。可警隣兵。是日。勅令筑前・肥前・壹岐・對馬等國嶋、戒慎不虞。又言。所禁新羅人潤清等卅人。其中七人逃竄。」

⑰ 貞観 13 年正月 15 日「大宰府言。壹伎嶋兵庫鼓鳴。」

⑱ 貞観 13 年 4 月 6 日「因幡國兵庫火。」

⑲ 貞観 13 年 5 月 10 日「佐渡國司言。兵庫震動。」

⑳ 貞観 14 年 7 月 17 日「遠江國兵庫自鳴。聲如槌鼓。」

㉑元慶 3 年 3 月 16 日「豊前國八幡大菩薩宮前殿東一神功皇后御前瑳。無故破裂。成九十片。破裂之時其鳴如犢細聲。又肥後國菊池郡城院兵庫戸自鳴。」

㉒元慶 3 年 11 月 4 日「隠岐國言上。兵庫震動。」

㉓元慶 4 年 2 月 28 日「先是。隠岐國言。兵庫振動。經三日後。庫中鼓自鳴。陰陽寮占曰。遠方兵賊。起自北方。是日。太政官符下因幡・伯耆・出雲・隠伎等國。慎令嚴警防護非常。」

㉔元慶 4 年 6 月 23 日「右兵庫寮中央兵庫自鳴。」

㉕元慶 5 年 6 月 23 日「兵庫自鳴。」

㉖元慶 5 年 8 月 14 日「加賀國言。太政官去六月廿九日下當道符偁。比日兵庫有鳴。著龜告云。北境東垂。可有兵火。自秋至冬。宜慎守禦者。謹撿。去弘仁十四年。分越前國。置加賀國。其後五十八年。未備非常。伏望請被給官庫甲冑。以備非常。自餘兵器。國宰將作者。勅。甲冑宜令國宰作焉。」

３．９世紀の対外危機について

（１）新羅兵寇の危機について

対外的危機（新羅兵寇）の高まりと鞠智城を結びつける見方が有力であるが、果たして妥当であろうか。新羅兵寇とは主に海賊行為を意味するものであり、国家主権（国憲）を侵

害する犯罪行為（海賊の横行）の対処が問題化したのであり、国家の存亡に関わる問題ではないことに注意すべきである。国家間の全面戦争、国家の存亡に関わる侵略が想定されていたわけではない、ということである。つまり、かつての7世紀後半のような山城を必要とする危機とは捉えられていないのではないか。

9世紀の対外危機（新羅兵寇）の実態

866（貞観8）年	肥前国基肄郡の川辺豊穂らの新羅人との対馬奪取計画が告げられる
同　年	隠岐国浪人安曇福雄らの新羅人との共謀による謀反密告（誣告）
869（貞観11）年	新羅海賊、博多湾停泊中の豊前国年貢船を襲い、絹綿奪取して逃走
870（貞観12）年	新羅に捕捉された対馬島民が帰国し、新羅の対馬奪取の風聞を伝える
同　年	大宰小弐藤原元利萬侶の新羅王と通謀しての謀反が告げられる
893（寛平5）年	新羅海賊が肥前国松浦郡・飽田郡を襲う
894（寛平6）年	新羅海賊が辺島・対馬に入寇す。対馬島司ら戦い、退去させる
895（寛平7）年	新羅海賊により壱岐島の官舎焼失す

（2）危機への対処について

基本的に8世紀末以降の軍縮の方針は維持されており、大幅な軍備増強に転換していないことを注意しなければならない。日本海沿岸諸国の警備強化、鴻臚館に警固所を設けるなど局所的な対応がとられただけで、西日本各地に山城を築いた7世紀後半の国防体制とは全く異なる。後の元寇の際に、防塁が築かれ、異国警固番役が設けられたことと比べても、全く危機のスケール、対処のレベルが異なっていると思われる。

そもそも、9世紀の対外危機を山城存続の理由とするならば、鞠智城以上に北九州や壱岐・対馬の山城がなぜ存続しなかったのか。また、不知火海との関連から鞠智城を重視するならば、それ以上に玄界灘の山城がもっとクローズアップされなければならないだろう。そもそも、弩師の配置から見ても、対外防備上の肥後の位置づけは低いと考えられる。

以上のことから、9世紀の対外危機と鞠智城の存続を結びつけることはできないだろう。

9世紀の対外危機における防備兵員の増強

統領・選士

869（貞観11）年	大宰府配備の統領1人・選士40人を鴻臚館に遷し置く
	大宰府例番のほか、統領2人・選士100人を増員し、鴻臚館に配備

夷俘

869（貞観11）年	200人（2番勤務）
895（寛平7）年	50人（1番勤務、博多警固所に加置）

9世紀における西日本諸国への弩師配置

西暦（和暦）	弩師配置国	備　考
814（弘仁5）	大宰府	前年に新羅人の肥前小値賀島島民殺傷事件
838（承和5）	壱岐	承和2年に新羅商人来着に備え壹岐要害警備
869（貞観11）	隠岐、長門	同年に新羅海賊の襲撃あり
849（嘉祥2）	対馬	
870（貞観12）	出雲、因幡、対馬	
871（貞観13）	伯耆	
875（貞観17）	石見	前年末の橿日宮託宣により新羅虜船に備う
879（元慶3）	肥前	
880（元慶4）	佐渡、越後	寛平5～7年に新羅海賊の入寇あり
894（寛平6）	能登、大宰府（追加）	
895（寛平7）	越前、伊予、越中	
899（昌泰2）	肥後	

4．9世紀以降に鞠智城が存続した理由について

（1）鞠智城の機能・特殊性

他の山城と異なる機能・特質を有したことが、存続の大きな理由ではないか。単純な国土防衛の軍事拠点としての山城であれば、侵略の危機が無くなった段階で用済みとなったはずであり、実際、多くの山城が停廃された。

大野城の場合は、「遠の朝廷」であった大宰府防衛拠点、大宰府の逃げ城という特殊な役割があったため、基本的に大宰府がある限り存続したものと考えられる。鞠智城の特殊な役割については、まだ未解明な部分が大きいが、他の山城と異なる様々な施設、構造、立地を有しており、特別な機能を有したことは間違いない。

（2）菊池郡との関わり

8世紀後半の衰退期（第Ⅲ期）を経て、9世紀以降（第Ⅳ・Ⅴ期）、鞠智城の性格が変わった可能性がある。大宰府直轄から肥後国菊池郡の管轄に変わり、鞠智城の機能（交通の要所にあり、厳重な保管機能があるなど）を生かす形で、食料や武器を保管・管理する施設になったのではないか。

9世紀に怪異が報告されたのも、その怪異を把握できる人員が配置され、官衙として機能していたことを示すものと考える。「菊池城院」という名称も、城そのものというよりは「正倉院」「穀倉院」など官衙の一施設的な名称のイメージがある。

鞠智城が廃絶した10世紀後半は、郡衙消失の時期とも重なり、「菊池城院」が郡の一施設化していたという推測に合致する。

おわりに

9世紀以降の鞠智城存続の問題から、鞠智城の山城としての特殊性の問題に行き着いた。鞠智城が他の山城と異なる特殊性を有したのはなぜか、そのことは鞠智城を築城した理由・目的と結びついているはずであり、この問題をさらに追求してゆくことが大事である。鞠智城の謎を解くことは、九州古代史のみならず日本古代史上の重要な課題であると確信する。

【主要参考文献】

赤司善彦 2016「古代山城研究の現状と課題」（『月刊文化財』631、2016年）

五十嵐基善 2015「西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能」（『鞠智城と古代社会』3）

石井正敏 2013「東アジア史からみた鞠智城」（『鞠智城シンポジウム 2012 成果報告書　ここまでわかった鞠智城』熊本県教育委員会）

加藤友康 2016「平安期における鞠智城」（『鞠智城東京シンポジウム 2015 成果報告書　律令国家と西の護り、鞠智城』熊本県教育委員会）

坂上康俊 2011「文献から見た鞠智城」（『鞠智城とその時代』熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館）

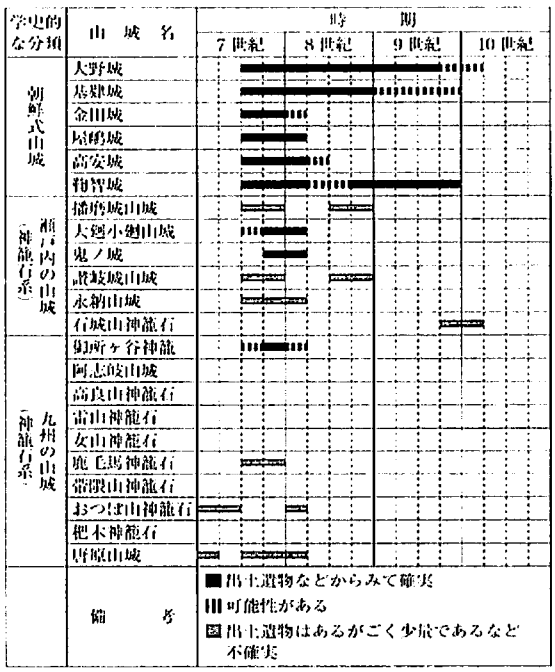
笹山晴生 2010『古代山城鞠智城を考える―2009年東京シンポジウムの記録』山川出版社）

鈴木拓也 2011「文献史料からみた古代山城」（『条里制・古代都市研究』26）

西嶋定生 2001『古代東アジア世界と日本』（岩波書店）

西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』（熊本県文化財調査報告第276集、熊本県教育委員会）

出土土器からみた古代山城の時期消長表



（赤司善彦 2016 より転載）

【講演③】

平安時代の大宰府と古代山城

松川博一（九州歴史資料館学芸員）

はじめに　ー存続する古代山城ー

７世紀後半に築造された古代山城は、高安城や茨城・常城をはじめその大半が８世紀初頭までに役割を終え、廃城となっている。そのなかにあって、奈良時代以降も存続した山城は、九州に築かれた大野城と基肄城・鞠智城の三城である。これらは、文武天皇２年(698)、大宰府によって「繕治」された三城にあたる。鞠智城はここではじめて史料上に登場する。

【史料１】『続日本紀』文武２年（698）５月甲申25日条

大宰府をして**大野・基肄・鞠智**の三城を繕治はしむ。

そして、正史で確認できる古代山城についての最後の記事は、『日本三代実録』にみえる元慶３年（879）の「菊池郡城院兵庫」の異変を伝えるものであり、鞠智城が少なくとも９世紀末頃まで山城として存続していたことが史料上うかがえる。

本報告では、古代山城と大宰府との関係やその役割について、史料を読み解きながら平安時代を中心にみていくことにする。

１　大宰府の軍制

大宰府の軍制の特色としては、以下の４点が挙げられる。

(1)防人制の成立

(2)軍団兵士制の長期的な存続

(3)大宰府常備軍の存在

(4)統領選士衛卒制の創出

いずれも大宰府および西海道(九州)がもつ地理的な環境に起因するものであり、対外防衛・対隼人対策をはじめとした辺境防備を担うべき地方軍制として成立し独自の過程をたどったものである。

(1)防人制の成立については、天智天皇２年（663）の白村江での敗戦の翌年、「対馬島・壱岐島・筑紫国等」に海辺防備を主な任務とした兵員として置かれた。その人員は、天平宝字元年（757）まで東国から徴発され、「東国防人」と呼ばれた。同じ天智天皇３年には水城の築造と烽の設置が行われ、さらに翌４年には大野城・基肄城が築城された。これとあまり時を隔てることなく鞠智城も築かれたと考えられている。防人の配備先については、壱岐島と対馬島以外、「筑紫国等」のどこを守備していたのかは史料上不詳であるが、当初は、対外防衛の最前線として、水城や大野城をはじめとした防衛施設に防人が配備された可能性はあろう。律令制下においては、大宰府の部内に防人司が設置され、防人制はその管理下で海辺防備を主な任務として、少なくとも延暦14年（795）まで存続している。

(2)軍団兵士制の長期的存続については、「辺要地」とされる大宰府管内と陸奥・出羽・佐渡等国にかぎって認められたものである。他の諸国は、延暦11年（792）に一般農民からなる軍団兵士制が廃止され、郡司子弟からなる健児制へ移行した。軍団兵士の役務は、①軍事訓練、②国府・兵庫・鈴蔵の守衛、関の守固、国内要地の守衛、官船の看守、③城隍・倉庫の修理、④天皇行幸時の護衛、外国使臣の送迎、犯罪者の護送など多岐にわたる。また、有事に際しては、将軍の指揮下で征隼人をはじめとした征討軍が編成された。

古代山城との関係からいえば、②の軍団兵士が守衛すべき兵庫の中には、史料上も確認できる大野城や鞠智城等の城内にあった兵庫も含まれると考えるべきであろう。③の城隍と倉庫の修理についても、軍防令の規定にあるとおり、「城」＝山城と「隍」＝水城の修築はもとより、城内に存在した正倉や兵庫などの倉庫、つまり「城庫」も修繕の対象であったことになる。律令制下において山城の守衛と維持管理を日常的に担っていたのは、軍団兵士であったと考えられる。西海道において軍団制が存続した理由のひとつには、有事の際の大宰府管内および国外への征討軍の派遣や後述する大宰府常備軍の母体の維持とともに、古代山城の守衛や修築のための兵員の確保があったのかもしれない。

(3) 大宰府常備軍とは、大宰府を守衛するための兵員のことである。大宰府常備軍は、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後などの6国から上番した軍団の軍毅・兵士や選士によって構成され、いうなれば「遠の朝廷」大宰府の「衛士」というべき存在であった。彼らは、日常的には、大宰府政庁をはじめとした官衙（役所）、特に兵庫や府庫（筑紫大蔵）の警衛、そして、大宰府の郭内、言い換えれば古代都市大宰府の治安維持を任務とした。大宰府常備軍は、西海道の総監府としての大宰府、そしてその西海道支配を完遂するための中核となる軍事力として位置づけることができるものである。

(4)統領選士衛卒制の創出とは、天長3年（826）に大宰府管内の軍団兵士が廃止され、大宰府と西海道九国二島に統領・選士・衛卒が置かれたことを指し、大宰府管内のみにみられる軍制である。その概要は、一般農民出身の軍団兵士にかわり「富饒遊手之児」を選んで選士となし、彼らを統率する者として軍毅にかわり統領を置くというものであった。大宰府には統領8人・選士400人、九国二島の西海道諸国にはあわせて統領34人（六国各4人・三国二島各2名）・選士1320人が配置された。くわえて、それまで兵士が担っていた雑役に専従する者として衛卒200人が確保され、兵馬の飼育や貢上染物所・作紙所の雑役、大野城の修理に当たった。これは、大宰府上番を含む西海道における軍制の独自なあり方と軍団兵士制が抱えていた雑役などの制度的な矛盾を実態に即して解消・整備した制度であった。また、兵士にかわり、古代山城の守衛や維持管理を担うべき存在でもあった。

このようにみてくると、大宰府の軍制は、防人制の成立から軍団兵士制の存続および大宰府常備軍の設置、そして統領・選士・衛卒制へと推移したことが確認できる。

2　大宰府と大野城

大野城が軍事拠点としての機能を果たすためには、それを守衛・維持するための兵員が

必要である。山城の管理については、職員令の国司の職掌に「城牧」とあるように、基本的に所在国の国司が責任を負うことになっていた。したがって、軍団兵士制下においては、国司の指揮の下で軍団兵士がその任に当たったと考えられる。西海道でいえば、大野城は筑前国、基肄城は肥前国、鞠智城は肥後国の軍団兵士がそれぞれ上番して守衛していたことになる。大野城の場合も弘仁11年（820）3月4日大宰府牒案（九州国立博物館所蔵文書）に「国別るるの時、国司、城を掌る」とみえるように、大宰府が筑前国を兼帯していない時には筑前国が所管していた。延喜5年（905）の「観世音寺資財帳」（東京藝術大学所蔵）には、「大野城山」に「遠賀門」の城門名がみえる。おそらくは筑前国の遠賀団（軍団）が守衛したことに由来する門号であろう。

一方、大宰府が筑前国を兼帯している時には大野城は大宰府の管理下に置かれ、その守衛は筑前国だけではなく、府下六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）の軍団兵士によって編成された大宰府常備軍が担っていたと考えられる。兵士の役務は、城門や城庫などの守衛だけではなく、城隍の修繕もあった。修繕にあたっては、大宰府の大工・少工が指揮を執り、修繕のための兵士が確保できない時には近隣の一般農民を人夫として徴発することも可能であった。大宰府と筑前国については、兼帯と別置を繰り返すが、大野城の管理については次第に大宰府が直接所管することが恒常化し、大宰府の官司内に大野城の管理を専当する主城（大主城・少主城）や城司（大野城司）が置かれることになる。

天長3年（826）、西海道の軍団制が廃止され統領選士衛卒制が施行されると、軍団兵士に替わり選士が兵員として守衛にあたることになったと考えられる。大宰府の選士400人のうち何人が大野城に配備されたかは不明であるが、大宰府における守衛対象施設として大野城が兵庫とならび優先順位が高かったことを考えればそれに割く人員は少なくなかったと考えるべきであろう。あわせて衛卒についていえば大宰府の衛卒200人のうち、その5分の1にあたる40人が大野城の修理をはじめとした日常的な維持管理のために常駐する規定となっていた。これをうけて大野城周辺の農民の中には、粮米を納める城庫の近くに居を構え衛卒らを相手に商売を行う者も現れた。彼らは万が一の際、臨時の兵員となることも期待されていたと考えられる。

大野城内には、発掘調査により多くの倉庫があったことがわかっている。古代の「クラ」の用字には、大きく「倉」と「庫」で使い分けがあったとされる。「倉」は穎稲・穀稲（籾米）・粟を納めるクラ、「庫」は武器・文書・書籍・布帛・宝物を納めるクラを指した。大宰府でいえば、大宰府管下の六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）から貢進された稲穀を納めたクラを「税倉（税庫）」といい、西海道諸国（九州一円）から貢納された布や真綿などの調庸物のほか武器・文書・書籍などを納めたクラを「府庫」という。特に調庸物を納めるクラは中央にならい「筑紫大蔵」と呼ばれた。そして、「税倉（税庫）」は税司、「府庫」は蔵司が所管していた。「府庫」の中でも武器庫は特に区別して「兵庫」と書かれる場合が多い。

大野城内にあった倉庫やその収納物について知ることができる史料は意外と少なく、い

ずれも平安時代のものである。大野城内の「クラ」は、大宰府政庁の周辺にあった「府庫」「税倉（税庫）」に対して、「城庫」と呼ばれていた。その「城庫」に納められていたものとして確認できるのは、貞観12年（870）5月2日太政官符にみえる「大野城器仗」と、同18年3月13日太政官符にみえる「大野城衛卒粮米」である。前者の「器仗」とは実用（兵仗）と儀礼用（儀仗）の武器・武具のことを指し、ともに「兵庫」に納められていた。大宰府の「兵庫」は、大宰府政庁の近くの「府庫」と大野城内の「城庫」の二か所であった。これらの兵庫は延暦18年（799）以降、不動とされ、原則として非常時と修理以外で開封されることは許されなかった。後者の「衛卒粮米」とは、大野城に配備され城の修理や日常の管理に当った衛卒40人分の粮米のことであり、毎月24斛が支給された。ただし、五使料以外のすべての庸米や雑米を府庫へ納めることを命じた貞観12年以前においては、その一部を城庫に収納していた可能性も皆無とはいえない。

3　大宰府と鞠智城

奈良時代の鞠智城のことを知ることができる史料はないが、養老衛禁律には、「筑紫城」へ不法侵入した際や鑰（カギ）を盗んだ際の罰則規定がある。

【史料2】養老衛禁律24越垣及城条

凡そ**兵庫**の垣、及び**筑紫の城**を越えたらば、徒一年。陸奥・越後・出羽等の柵も亦同じ。曹司の垣は、杖一百。**大宰府**の垣も亦同じ。国の垣は、杖九十。（後略）

【史料3】**養老賊盗律27盗節刀条**

凡そ節刀を盗めらば、徒三年。宮殿門・**庫蔵及び倉稟・筑紫の城等の鑰**は、徒一年。**国郡の倉庫**、陸奥・越後・出羽等の柵及び三関の門鑰も、亦同じ。（後略）

「筑紫城」とは、筑前の大野城だけではなく【史料1】を踏まえれば、肥前の基肄城や肥後の鞠智城を含むと考えるのが妥当であろう。兵庫の垣を越えることと九州の山城や東北の城柵の土塁・石垣・柵列を越えることが最も重い罪に問われている。また、山城の鑰を盗んだ罪は、宮殿門とともに各種倉庫の鑰を盗んだのと同罪とされている。大宰府管内の山城そのものが、警衛区域として東北の城柵や倉庫、とりわけ兵庫と同等との認識があったことを意味する。

平安時代には、鞠智城内にあった兵庫の異変と不動倉の火災を伝える記事がみえる。

【史料4】『日本文徳天皇実録』天安2年（858）閏2月丙辰24日・丁巳25日条

丙辰、**肥後国**言す。**菊池城院の兵庫**の鼓、自ら鳴る。丁巳、又鳴る。

【史料5】『日本文徳天皇実録』天安2年（858）6月己酉20日条

己酉、**大宰府**言す。去る五月一日、大風暴雨。官舎悉く破れ、青苗朽ち失う。九国二嶋尽く損傷を被る。**又肥後国菊池城院の兵庫**の鼓、自ら鳴る。**同城の不動倉**十一宇、火く。

これらの記事から、鞠智城内には大野城と同様に兵庫があったことがわかる。このように兵庫内の器仗等が自鳴したり兵庫の上に大鳥が群れたりするといった兵革・凶事の予兆

記事は特に９世紀後半に多くみられるものである。翌３年には、同じく大宰府が筑前国志摩郡の兵庫の鼓が自鳴したことを報告している。さらに貞観 11 年（869）には、新羅海賊による豊前国貢綿掠奪事件をうけて、大宰府の兵庫などでの怪異記事がみえる。この時には現実的な対応として、俘囚の大宰府配備のほか、大宰府や鴻臚館に常駐する統領・選士の増員、府庫や大野城の城庫に納める武器・武具の検定の強化が行われている。

【史料６】『日本三代実録』貞観 11 年（869）12 月庚子 17 日条

去ぬる夏、新羅海賊、貢綿を掠奪す。又、大鳥有りて、大宰府の庁事并びに門楼・**兵庫**の上に集う。神祇官・陰陽寮言さく、当に隣境の兵寇有り。（後略）

また、【史料５】で注目すべきは、鞠智城内に不動倉が 11 棟以上存在したことである。不動倉とは、正倉のうち、稲穀で満杯となり封印された非常備蓄用の倉のことをいい、郡ごとに置かれていた。その稲穀は不動穀といって賑給のような特別な場合を除き消費できないことになっていた。

大宰府政庁跡の前面に位置する不丁地区官衙跡から出土した木簡のなかには、大宰府が基肄城に収納されている稲穀を「筑前・筑後・肥国等」の大宰府管内諸国に分かち与えたことを示す８世紀前半の文書木簡がある。

【史料７】大宰府政庁跡周辺官衙跡（不丁地区）出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣**基肄城**稲穀随　大監正六上田中朝[　　]

（筑前・筑後・肥等の国に班給せんがために、基肄城の稲穀を遣わして、（大宰）大監正六（位）上田中朝（名欠）に随はしむ）

稲穀が諸国に班給される理由として考えられるのは、疫病・災害・飢饉に際して稲穀を病人・高齢者・貧窮者らに支給する賑給である。田中朝臣については名を欠いているが、『播磨国郡稲帳』から天平４年（732）頃に大宰少監として赴任した田中朝臣三上である可能性が高い。なお、三上は天平８年正月に正六位上から外従五位下へ昇進している。天平４年から７年の間で賑給を必要とした事態としては、天平７年の大宰府管内における疫病の流行が想起される。この時、疫病患者らに対して８月と閏 11 月の２回にわたり賑給が行われている。以上のことから、この木簡は古代山城に稲穀が貯蔵されていたことを明証するだけではなく、それが疫病への救済策に使用された可能性を示す。基肄城の稲穀もまた、賑給であったとすれば、動用穀が不足すれば不動穀が充てられたであろう。この木簡は、鞠智城の不動倉の役割を考える上でも貴重な史料である。

鞠智城に関する最後の記事も兵庫における怪異記事である。その前には、外征や国家鎮護の神として神功皇后を祀る宇佐八幡宮での異変も報告されており、両者は到底無関係とは考えられず、ともに新羅来寇の予兆記事と捉えるべきであろう。

【史料８】『日本三代実録』元慶３年（879）３月丙午 16 日条

豊前国八幡大菩薩宮の前殿の東の一、神功皇后の御前の瓶、故無く破裂して九十片と成る。破裂せし時、其の鳴ること犢の細き声の如し。**又肥後国菊池郡城院の兵庫**の戸、自ら鳴る。

前年12月には大宰府から「隣敵」である新羅がわが国の隙を窺っているとの香椎宮の託宣がもたらされ、大宰府の警固や管内の神祇への奉幣が命じられている。鞠智城での異変が起こる前月の2月には、大宰府が肥後国に弩師を置くことを申請し許可されており、その警固の範囲が大宰府周辺だけでなく肥後国にも及んでいたことがわかる。

4　古代山城と寺院

大野城築城から約1世紀後にあたる宝亀5年（774）、城内に四天王寺（四王寺・四王院）という寺院が建立される。

【史料9】『類聚三代格』宝亀5年（774）3月3日太政官符

太政官符す

応に**四天王寺**に塑像四軀を造り奉るべき事 おのおの高さ六尺

右、内大臣従二位藤原朝臣の宣を被るにいわく、勅を奉るに、聞くならく、**新羅**は兇醜にして恩義を顧みず、早く毒心を懐き、常に呪詛をなす。仏神誣しがたく慮り、あるいは報応す。宜しく大宰府をして新羅国に直する高顕浄地に件の像を造り奉り、その災を攘却せしむべし。よりて浄行の僧四口を請じ、おのおの像前に当たり、一事以上は最勝王経の四天王護国品によれ。日は経王を読み、夜は神呪を誦えよ。ただし春秋の二時、一七日ごとにいよいよますます精進し、法により修行せよ。よりて監已上の一人、その事に専当せよ。その僧別の法服は、麻の袈裟・蔭脊はおのおの一領、麻の裳・絁の綿の袴は各一腰、絁の綿の襖子・汗衫はおのおの一領、襪・韮はおのおの一両、布施は、絁一疋、綿三屯、布二端。供養と布施はならびに庫物および正税を用いよ。今より以後永く恒例とせよ。

宝亀五年三月三日

造寺の目的は、新羅の宗教的な呪詛に対抗し、四天王と金光明最勝王経の力により国家を守護するためである。大野城内の「高顕浄地」な場所として四王寺山西北の最高所である鼓峯が選ばれ、そこに四天王寺が建立され、堂内には塑造の四天王像が安置された。大野城内には、北西方の最高所に毘沙門天、東方に持国天、南方に増長天、西南方に広目天の地名が残ることから、それぞれの峰に尊像が配されたとの理解もある。各峰に修法のための堂舎があった可能性はあろうが、やはり史料が語るように当初から鼓峯の一所に四天王像が揃って安置されていたと理解すべきであろう。そして、四天王像の前で精進・修行を行う4名の浄行の僧が置かれ、昼間は護国経典である金光明最勝王経、夜間は神呪を読誦するように命じられている。専当官としては、大宰府の監以上1名を任じ、寺院運営に必要な経費や物資は大宰府の府庫および西海道諸国より納められた正税を充当するように指示している。大宰府が筑前国を兼帯していた時期に当たることもあるが、鎮護国家思想の下で建立された大宰府直属の官寺であったことがわかる。

しかし、「内外無事」との意識の下、延暦20年（801）、四天王寺（大野山寺）において四天王法を行うことは停止され、四天王像をはじめ堂舎法物等は筑前金光明寺、つまり筑

前国分寺に遷置された。ところが、大同２年（807）、四天王像の移置以来、大宰府管内で疫病が甚だしいため、四天王寺の再興が大宰府によって申請され許可されている。

【史料 10】『類聚国史』巻第一八〇　大同２年（807）12 月甲寅１日条

大宰府いわく、**大野城の鼓峰**において、堂宇を興し建て、四天王像を安置し、僧四人をして法のごとくに修行せしむ。しかるに制旨により、すでに停止に従い、その像ならびに法物など、ならびに筑前国金光明寺に遷し置きおわんぬ。その堂舎などは、今猶存す。しかるに像を遷して以来、疫病もっともはなはだし。伏して請うらくは、もとの処に遷し奉らんことを、てえれば、これを許す。但し僧を請いて修行することは停む。

前年の勅によれば、大宰府管内は水旱・疾疫などが相次ぎ、百姓は彫亡し、田園も荒廃するという有様とのことである。四天王寺の役割が新羅に対する軍事的な脅威から国内における疫病という観念的な脅威への対策に変容したとされる。四天王寺の創建自体がそもそも新羅に対する観念的な国土守護を目的としたものであることを考えれば、四天王寺の再興は疫病が新羅よりもたらされるもの、あるいは新羅の呪詛によるものとの認識に基づく対抗策といえよう。同４年には四天王寺の所在する大野城鼓峯において四天王法が再び行われることになる。さらに弘仁２年（811）には釈迦如来像も造立されている。

四天王寺の造立はちなみに大宰府だけではない。出羽国の秋田城内には、天長７年(830)の時点で丈六の四天王像を安置した四天王寺が建立されていたことが、『類聚国史』同年条により確認できる。また、『延喜式』主税上によれば、出羽国において四天王法が修されており、その修法の場は四天王寺であったと考えられる。

その後、大宰府の四天王寺(四王院)が登場するのは、新羅海賊が横行する貞観８年(866)のことである。

【史料 11】『日本三代実録』貞観８年（866）２月庚申 14 日条

神祇官いわく、**肥後国**阿蘇大神、怒気を懐蔵き、是に由りて疫癘が発り、隣境の兵を憂ふべし、と。勅あり、国司は潔斎して至誠奉幣し、并せて金剛般若経千巻、般若心経万巻転読し、**大宰府司**は**城山の四王院**に、金剛般若経三千巻、般若心経三万巻を転読し、以て神の心に謝し奉り、兵疫を消伏せよ、と。

肥後国の阿蘇大神の怒りにより、疫病の発生と新羅の来寇が懸念されるとして、肥後国司が阿蘇大神への奉幣と金剛般若経などの経典の転読を執り行い、大宰府でも四天王寺(四王院）において同じく経典の転読が行われている。

さらに、翌９年（867）には、四天王法による新羅調伏のため、日本海を挟んで新羅と対峙する山陰道の伯耆・出雲・石見・隠岐・長門等の諸国において四天王寺（四王寺）が建立される（『日本三代実録』貞観９年５月甲子 26 日条)。そして、その修法や寺院運営のあり方は大野城内の四天王寺を範とするものである。新羅への脅威を契機として、辺境地域における四天王寺や四天王法のひろがりがうかがえる。

鞠智城についての怪異記事がみられるのは、全国的に新羅や疫病への脅威が高まった時期にあたる。【史料 11】の「兵疫」の一語が示すとおり、新羅の来寇と疫病の流行は、当

時の人びとにとっては対外的な脅威として一体のものとして捉えられていた可能性が高い。城内の兵庫に納められた武器・武具や不動倉に集積されていた稲穀はその脅威への現実的な備えであり、神仏への祈りはその脅威への観念的な防御策であったと考えられる。

おわりに－大宰府の危機管理と古代山城

大宰府は、西海道（九州全域）の支配のほか、対外防衛の拠点や外交の窓口という重要な役割を担っていた。それにより管内の疫病・飢饉対策に止まらず、対外国および対隼人などの軍事に関わる費用や外国使節の応接の経費といった、優先すべき臨時的な支出が発生する可能性が他の地域や官司に比べて極めて高かった。その万が一の蓄えや備えとして、大野城・基肄城や鞠智城など大宰府管内の古代山城に、有事の際に必要な武器・武具を納める兵庫や、兵粮はもとより非常時の公粮、さらには財源を蓄える倉庫を設け、大宰府の厳しい統轄下に置いたと理解できる。特に平安時代に入り９世紀後半には、新羅や疫病に対する脅威から、大宰府管内の山城がもつ兵庫に象徴される軍事拠点としての重要性や不動倉を擁する備蓄基地としての必要性、さらには大野城については国家鎮護の聖地としての役割がふたたび注目されたと考えられる。

参考文献

赤司善彦 2014 「古代山城の倉庫群の形成について－大野城を中心に－」『東アジア考古学論攷』２、中国書店

五十嵐基善 2015 「西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能」『鞠智城と古代社会』３

磯村幸男 2010 「西日本の古代山城」『史跡で読む日本の歴史３』吉川弘文館

大高広和 2013 「八世紀西海道における対外防衛政策のあり方と朝鮮式山城」『鞠智城と古代社会』１

木村龍生 2016 「鞠智城の役割について」『季刊考古学』136

倉住靖彦 1990 「大野城司考」『古代中世史論集』吉川弘文館

酒井芳司 2010 「大宰府・水城」『史跡で読む日本の歴史３』吉川弘文館

佐藤信 2014 「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ－論考編１－』熊本県教育員会

鈴木拓也 2010 「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26

鈴木拓也 2010 「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4

西本哲也 2015 「鞠智城と大宰府－古代の地方行政と西海道」『鞠智城と古代社会』３

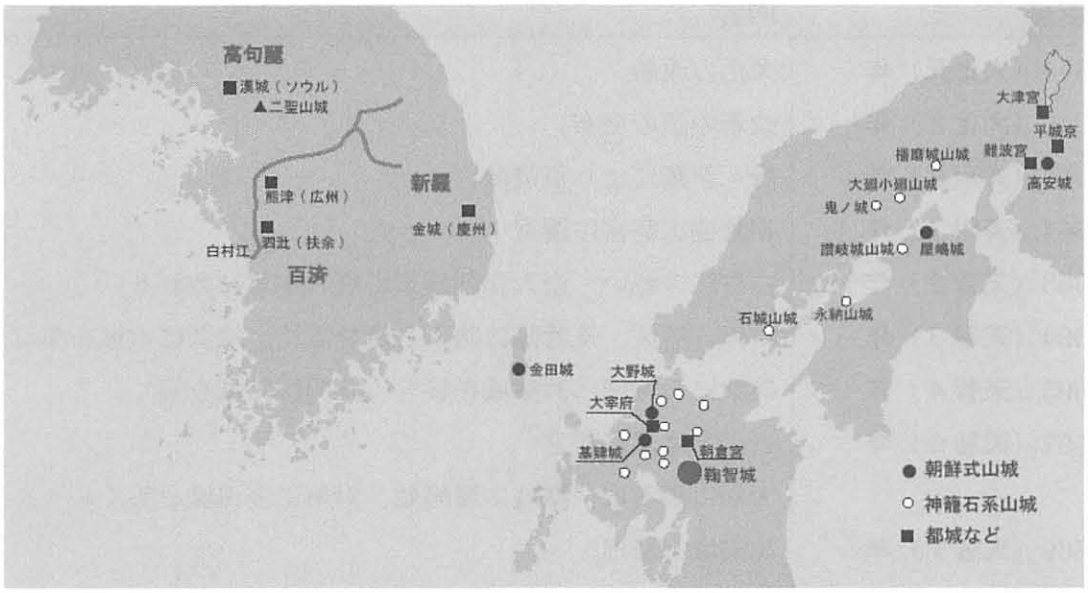
平野邦雄 1983 「クラ（倉・庫・蔵）の研究－大宰府、郡家の発掘調査によせて－」『大宰府古文化論叢』下巻、吉川弘文館

古内絵里子 2014 「日本における古代山城の変遷－とくに鞠智城を中心として－」『鞠智城と古代社会』２

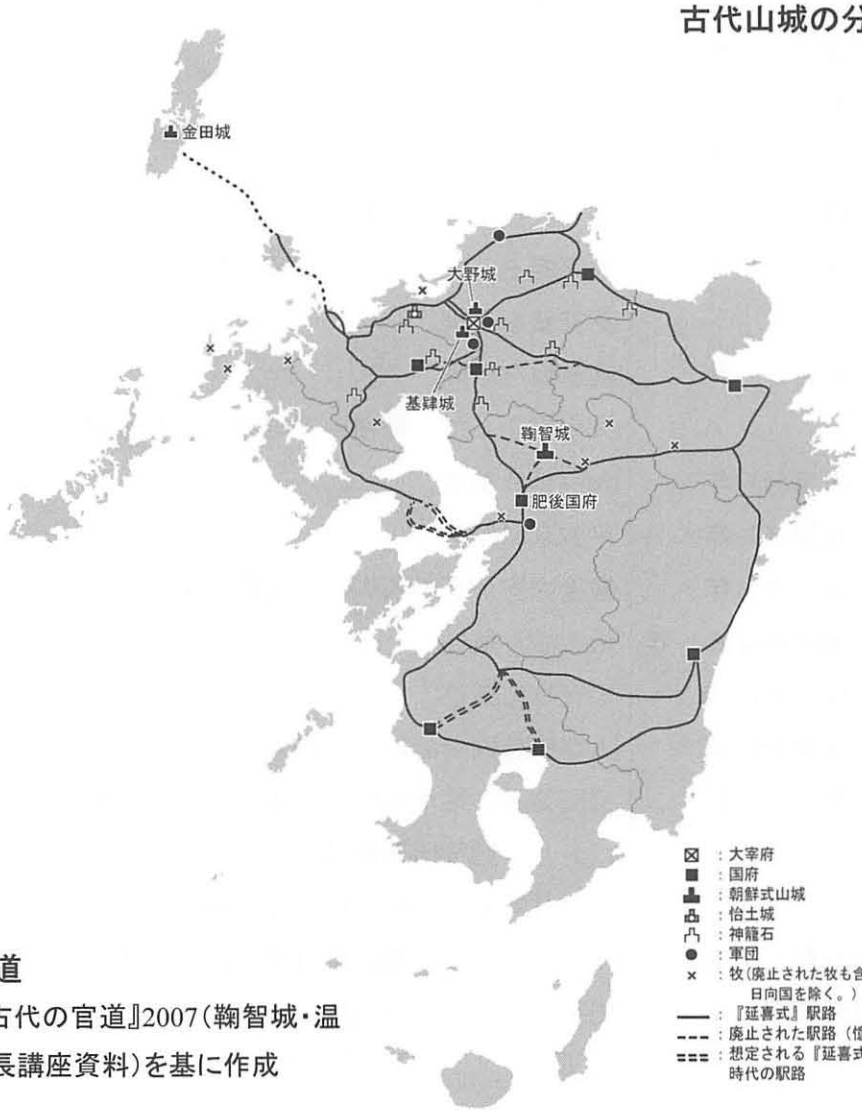
松川博一 2012 「大宰府軍制の特質と展開－大宰府常備軍を中心に－」『九州歴史資料館研究論集』37

松川博一 2014 「大宰府と寺社」『都城制研究』8
矢野裕介 2016 「鞠智城（熊本県）」『季刊考古学』136
渡辺晃宏 1989 「平安時代の不動穀」『史学雑誌』98-12

≪参考資料≫



古代山城の分布



古代の西海道

※日野尚志『古代の官道』2007（鞠智城・温故創生館　館長講座資料）を基に作成

鞠智城関連年表

西暦（年号）	内容
645（大化元）年	大化の改新。
646（大化２）年	改新の詔の発布。
660（斉明６）年	唐・新羅により百済滅亡。
661（斉明７）年	朝倉橘広庭宮に遷宮
663（天智２）年	白村江の戦い　※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664（天智３）年	対馬、壱岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665（天智４）年	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667（天智６）年	近江大津宮に遷宮
	大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
669（天智７）年	高安城を修理。
670（天智９）年	高安城を修理
672（天武元）年	壬申の乱
676（天武５）年	新羅が朝鮮半島を統一。
678（天武７）年	筑紫国大地震
696（持統10）年	※「肥後国」の文献上の初見。
698（文武２）年	大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治する。
	高安城を修理。
699（文武３）年	高安城を修理。
	大宰府をして、稲積、三野の二城を修理する。
701（大宝元）年	大宝律令制定。
710（和銅３）年	平城京に遷都
719（養老３）年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756（天平勝宝８）年	怡土城を築城。
794（延暦13）年	平安京に遷都
799（延暦18）年	大宰府管内を除いて、烽を廃止。
858（天安２）年	（閏２月）菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
	（５月）肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
	（５月）菊池城の不動倉１１棟が火災に遭う。
875（貞観17）年	カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草を噛み抜く。
879（元慶３）年	肥後国菊池城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

この電子書籍は、鞠智城の終焉と平安社会 鞠智城シンポジウム発表要旨 2016 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城の終焉と平安社会 古代山城の退場
鞠智城シンポジウム発表要旨 2016
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日